

葬送習俗の民俗変化 1

血縁・地縁・無縁

Changes in Funeral Customs I :
A Case Study of the South-Central Part of Okinawa Main Island

新谷尚紀

SHINTANI Takanori

- ①日本民俗学は伝承分析学 Traditionology である
- ②伝統的な葬儀とその担い手—1990年代の調査情報から
- ③血縁から地縁へ—民俗資料から
- ④血縁から地縁へ—歴史史料から
- ⑤論点

【論文要旨】

本稿は日本各地の葬送習俗の中に見出される地域差が発信している情報とは何かという問題に取り組んでみたものである。それは長い伝承の過程で起こった変遷の跡を示す歴史情報であると同時にその中にも息長く伝承され継承されている部分が存在するというを示している情報である。柳田國男が創生し提唱した日本民俗学の比較研究法とはその変遷と継承の二つを読み取ろうとしたものであったが、戦後のとくに1980年代以降の民俗学関係者の間ではそれが理解されずむしろ全否定されて個別事例研究が主張される動きがあった。それは柳田が創生した日本民俗学の独創性を否定するものであり、そこからは文化人類学や社会学との差異など学術的な自らの位置を明示できないという懸念すべき状況が生じてきている。日本民俗学の独創性を継承発展させるためには柳田の説いた視点と方法への正確な理解と新たな方法論的な研磨と開拓そして研究実践とが必要不可欠であり、民俗学は名実ともに folklore フォークロアではなく traditionology トラデシヨノロジイ(伝承分析学)と名乗るべきである。日本各地の葬送習俗の伝承の中に見出される地域差、たとえば葬送の作業の中心的な担当者が血縁の関係者か地縁の関係者かという点での事例ごとの差異が発信している情報とは何か、それは、古代中世は基本的に血縁の関係者が中心であったが、近世の村落社会の中で形成された相互扶助の社会関係の中で、地縁の関係者が関与協力する方式が形成されてきたという歴史、その変遷の段階差を示す情報と読み取ることができる。本稿1は別稿2とともに今回の共同研究の成果として提出するものであり、1950年代半ばから70年代半ばの高度経済成長期以降の葬儀の変化の中心が葬儀業者の分担部分の増大化にあるとみて現代近未来の葬儀が無縁中心へと動いている変化を確認した。つまり、葬儀担当者の「血縁・地縁・無縁」という歴史的な三波展開論である。そしてそのような長い葬儀の変遷史の中でも変わることなく通貫しているのはいずれの時代にあっても基本的に生の密着関係が同時に死の密着関係へと作用して血縁関係者が葬儀の基本的な担い手とみなされるといふ事実である。近年の「家族葬」の増加という動向もそれを表わす一つの歴史上の現象としてとらえることができる。

【キーワード】 Traditionology (伝承分析学), 比較研究法, 変遷論と伝承論, 血縁・地縁・無縁, 研究の世代責任

①……………日本民俗学は伝承分析学 Traditionology である

(1) 民俗学の葬送習俗研究

葬送墓制に関する研究は日本民俗学が古くから取り組んできたものであり先人たちの多くの研究蓄積がある。その先がけとなったのは柳田國男「葬制の沿革について」⁽¹⁾であった。そして戦後の昭和30年代には柳田門下の井之口章次『仏教以前』⁽²⁾や最上孝敬『詣り墓』⁽³⁾などが刊行されてその後の研究に大いに刺激を与えた。そして、昭和54年(1979)には『葬送墓制研究集成』全5巻(第1巻 葬法、第2巻 葬送儀礼、第3巻 先祖供養、第4巻 墓の習俗、第5巻 墓の歴史)⁽⁴⁾が刊行されて当時の民俗学の研究水準が示された。しかし、その1980年当時というのは、逆にそれまで伝統的であった葬儀や墓制に大きな変化が日本各地で列島規模で起こってきていた時期でもあった。家での死から病院での死へ、近隣の相互扶助による葬儀から葬儀業者の手による葬儀へ、土葬から火葬へ、葬送の自由の問題化へ、家ごとの墓地から大規模集合墓地へ、などのめまぐるしい変化が各地で起こってきていたのである。そこで、そのような列島各地での具体的な変化の実態調査の必要性への認識の高まりの中で、民俗学の立場からのアプローチとしては、たとえば1997年度(東日本)と1998年度(西日本)の2年度にわたって国立歴史民俗博物館資料調査「死・葬送・墓制の変容についての資料調査」が行なわれて、全国60地区の1960年代の葬儀と1990年代の葬儀の具体例に関する比較情報の調査収集などがなされた。そしてその成果が『国立歴史民俗博物館資料調査報告書9 死・葬送・墓制資料集成』⁽⁶⁾として、また『葬儀と墓の現在—民俗の変容—』⁽⁷⁾として刊行されている。個別の事例研究も葬儀の変容をめぐる問題に関心が集中する傾向がみられた。⁽⁸⁾そして現在の状況としては、日本各地の個別事例調査研究の成果の収集と整理による比較の視点での共同研究によって日本民俗学のめざす列島規模の立体的な生活文化変遷論へと結実していくことが期待されているのが現状である。⁽⁹⁾

そうした認識の上で、ここで注目してみたいのは、第1に、年代的にラストチャンスと思われる1960年代までの葬儀の民俗の情報の整理、そして時代的に現在ならまだ可能であろうそれら旧来の葬儀の民俗が発信していた情報を読み取ることである。それは、昭和30年代(1955～65)から40年代(1965～75)の高度経済成長⁽¹⁰⁾の大きな影響をうける以前まで伝えられていたそれまでの伝統的な葬送の民俗の情報を1990年代に筆者が行なって得られている民俗調査の事例情報の再確認の作業にもとづくものである。そこには、たとえば葬送の担い手の中心が「血縁」から「地縁」へと変化してきたという歴史的な変遷の跡を追跡することができるような情報群が存在している。第2には、その1990年代の民俗調査の時点からその後さらに大きく変貌してきている2010年代の現在の葬儀の変化の現況の実態確認である。その大きな眼前の変化を追う中で注目されてきているのが、葬儀の担い手の中心が「地縁」から「無縁」へと移行しているという変化である。この葬送儀礼をめぐる、血縁・地縁・無縁という三者分類を筆者がはじめて提示したのは1980年代の民俗調査とその分析の時点であったが、⁽¹¹⁾あらためてその有効性についての再確認の作業を行なってみる。

(2) 民俗学とは何か—folklore (フォークロア) ではなく, traditionology (トラディシヨノロジー) である

本書は日本民俗学の視点と方法によるアプローチであるが、その日本民俗学という学問について、現今の学術世界においてまた一般社会においても正しく理解されていないという懸念がある。それは、第1には、柳田國男が折口信夫の理解と協力を得ながら創生した日本の民俗学が十分には理解されずに、その基本的な視点と方法であった方言圏論や重出立証法などといわれる比較研究法が戦後の大学教育の中で誤解の中で全否定されていった歴史をもっているからである。⁽¹²⁾第2には、民俗学を安易にフォークロア folklore と名乗りまたそのように理解するという傾向があるからである。周知のようにフォークロア folklore という学術分野はすでに西欧中心の学術ヘゲモニーの中では国際的にも存在せずその分野のドクターもプロフェッサーも存在しない。それは視点と方法論の両者ともにその学術的な独創性、独自性がフォークロア folklore には存在していないからである。社会学 sociology や文化人類学 cultural anthropology という学問分野はもちろん国際的に存在する。そして、日本の民俗学はそれらに隣接しながらもそれらとは異なる学問である。フォークロア folklore と名乗るべきではない独創的な学問であるという点について、以下、簡潔な説明を行なっておくことにする。

柳田國男が折口信夫の理解と協力を得て創生したのが日本の民俗学である。それはフォークロアやフォルクスウンデの翻訳学問などではなく、もちろん文化人類学の一分野でもない。それは日本民俗学の創生史を追跡してみれば明らかである。文化人類学のアンチテーゼが西洋哲学であるのに対して、柳田の創始した日本民俗学のアンチテーゼは文献史学である。それは東京帝国大学を窓口として輸入された近代西欧科学の中には存在しない日本創生の学問である。だから官の学問ではなく野の学問だといわれるのである。それだけに、近代科学の中では理解されにくく誤解に満ちているのが現状である。しかし、文献記録からだけでは明らかにならない膨大な歴史事実が存在する、その解明のためには民俗伝承を有力な歴史情報として蒐集調査し分析する必要があるという柳田の主張は独創的であった。⁽¹³⁾その柳田はイギリスの社会人類学やフランスの社会学に学びながら日本近世の本居宣長たちの学問をも参考にして、フランス語のトラディシオン・ポピュレール tradition populaire を民間伝承と翻訳して、自らの学問を「民間伝承の学」と称した。折口信夫はそれを民間伝承学と呼んでいる。それを継承する私たちの研究姿勢をいまあらためて名乗るなら、tradition populaire から一歩進んで、traditionologie culutuelle 伝承文化分析学、英語では cultural traditionology というべき学問である。より簡潔に学際的かつ国際的に名乗るならば、traditionology トラディシヨノロジー 伝承分析学という名の学問である。つまり、tradition 伝承文化を研究する学問である。このフランス語の traditionologie も英語の traditionology もかつて一度使われようとした語ではあったが、西欧近代科学の中では学問として創生されることはなかった。⁽¹⁴⁾それを学問として完成させていったのが柳田であり折口だったのである。

日本民俗学（伝承分析学 traditionology）の特徴は、文献記録を中心とする歴史学の成果はもとより考古学の成果にも学びつつそれらの研究現場にも学際的に参加しながら、自らの研究対象分野としての民俗伝承を中心として、伝承的な歴史事象を通史的に総合的に研究することをめざす点に

ある。その伝承分析学（日本民俗学）は「変遷論」と「伝承論」という二つの側面をもつのが特徴であり、基本的な方法は比較研究法である。日本各地の民俗伝承を歴史情報として読み解こうとする比較研究法である。変遷論の視点から明らかにしようとするのは、地域差や階層差などを含めた立体的な生活文化変遷史である。たとえば柳田は小児の命名力に注目しながらデンデンムシの名前にはカタツムリよりも前の呼称がありそれはナメクジであったことを明らかにしている。そのような方言の伝播の問題、結婚習俗の変遷、墓と葬儀の歴史、盆行事の列島規模での変遷などその他の研究例も、柳田や折口に学びながらそれを再構築しようとする現在の民俗学がすこしずつ蓄積してきている。また、伝承論の視点から明らかにしようとするのは、長い歴史の変化の中にも伝えられている変わりにくいしくみ、伝承を支えているメカニズムであり、それを表わす分析概念の抽出である。ハレとケ、依り代、まれびと、などが柳田や折口の抽出した分析概念であるが、その後は、たとえばケガレからカミ⁽¹⁵⁾へなどといったメカニズムやそれを表わす分析概念も提示してきている。このような伝承分析学（日本民俗学）の観点から本書は小さな作業の結果を提示してみるものである。

(3) 柳田國男『先祖の話』の誤読と理解

柳田國男の比較研究法を主軸とする民俗学、民間伝承学、伝承分析学を理解できずに誤解して否定していった人たちは『先祖の話』も大きく誤読し誤解している。その誤読の最たるものは、一つには、この本が戦場に向かう若い学徒や兵士たちをめぐる戦死者祭祀の問題を主題としたものであるという誤読である。そしてもう一つが、この本が戦争遂行のイデオロギーを民俗学的に説明しようとしたものであるという誤読である。直接、原著をよく読まずにつまみ食いの読み方をして柳田を論評する風潮は困りものである。それらの鵜呑みによる誤読の伝言ゲームも困りものである。しかし、読者一人一人が原著をよく読みさえすれば柳田への誤読や誤解は防ぐことができる。この『先祖の話』の執筆動機とは何か、それは「自序」で明言されているとおりである。すなわち読めば誤読の可能性などはないはずである。ここに重要な部分を紹介しておく。

(1)「家の問題は自分の見るところ、死後の計画と関連し、また靈魂の觀念とも深い交渉をもって、国ごとにそれぞれ常識の歴史がある。理論はこれから何とでも立てられるか知らぬが、民族の年久しい慣習を無視したのでは、よかれ悪しかれ多数の同胞を安んじて追隨せしめることができない。家はどうなるか、どうなって行くべきであるか。もしくは少なくとも現在において、どうなるのがこの人たちの心の願ひであるか。それを決するためにも、まず若干の事実を知っていないと、はならない。」

(2)「常識の世界には記録の証拠などはないから、たちまちにして大きな忘却が始まり、以前はどうだったかを知る途が絶えていくのである。もとより、以前とても次々の変化はあった。人の行為と信仰とは時と共に改まっている。どこをつかまえて以前の状態というのかと思う者もあるか知らぬが、ともかくも、変わらぬ前の姿を尋ね出すことが、今ならばできるのである。これには幸いにして都鄙・遠近のこまごまとした差などが、各地の生活相の新旧を段階づけている。その多くの事実の観察と比較とによって、もし伝わってさえいてくれるならば、大体に変化の道程を跡付け得られるのである。」

(3)「これにもいくつかのまじめな動機があったのである。第一に、私は世のいわゆる先覚指導者に、これらの事実を留意させ、また討究せしめるに先だって、先ず多数少壯の読書子の、今までに世の習いに引かれて知識が一方に偏し、ついぞこういう題目に触れなかった人たちに、新たな興味が持たせたいのである。第二には、私の集めてみようとする資料は、白状すれば実はまだはなはだ乏しいのであった。多くの世人がほんの皮一重の裡に持って、忘れようとしている子供の頃の記憶は、このわずかな機縁に由っていくらでも喚び醒まされ、一種楽しい感慨をもってこういう文章を読み得るのみでなく、さらに一步を進めては、その思い出したのもをもって、筆者に告げ教えることさえできるかと思うのである。」

(4)「私は年をとり力やや衰え、志はあっても事業がそれに追いつかず、おまけにこの時代の急転に面して、用意のまだはなはだ不足だったという弱点を暴露した。ゆえにこの本のねうちなども、そう大したものとは思わない。今はひたすらにこれから世に立つ新鋭の間から、若干の理解と共鳴とを期するばかりである。」

この(1)から(4)の文章が告げていることは明かである。柳田がその生涯をかけて創生した民間伝承学としての民俗学の視点と方法とを理解して、その後継の人たちが1人でも多く育ててもらいたいという念願である。そして、次の(5)の文章こそ、柳田の創出した民間伝承学という学問の存在意義が何であるかが力説されているものである。

(5)「人に自ら考えさせ、自ら判断させようとしなかった教育が、大きな禍根であることは、もう認めている人も多かろう。しかし国民をそれぞれに賢明ならしめる道は、学問より他にないということまでは、考えていない者が政治家の中には多い。自分はそれを主張しようとするのである。長い歴史を振り返ってみても、人に、現代のように予言力が乏しい時代はなかった。その不幸は戦後にもなお続くものと思えられる。少しなりともこの力を恢復するためには、学者もまた頗る刻苦しなければならぬのはもちろんである。」

国民と社会を不幸にしてしまうまちがった政治が行なわれないようにするためには国民一人ひとりが学問をして賢明なる判断ができるようにしなければならない。そのためには自分たちの先祖から現在までの生活の歴史と変遷を知ろうとするこの民間伝承学をはじめとするさまざまな学問こそが重要であるというのである。柳田の世界ははるかの高みにある崇高なものと思うが、あとに続く者の中の一人として、その民間伝承学の視点と方法である「幸いにして都鄙・遠近のこまごまとした差などが、各地の生活相の新旧を段階づけている。その多くの事実の観察と比較とによって、もし伝わってさえいてくれるならば、大体に変化の道程を跡付け得られるのである。」という柳田の教示を大切にしたい。そしてそれを受けて、自分なりにその作業に取り組んでみたい。そう思ってまとめてみたのが本稿である。そして、できることならば、この柳田の学問の視点と方法と意義とをさらに磨き発展させていくこれからの若き人たちに伝えておくことができればありがたいと考えている。

(4) 葬式と講中の世話

平成7年(1995)6月6日、山口県豊北郡豊浦町角島、日本海の響灘に浮かぶ半農半漁の島で、西田雪雄氏が満86歳で亡くなった。明治42年(1909)生まれで、若いころは相撲が強く各地の大

会でも名をはせたものだった。長男は養子に出て堅実な教師となり最近校長で定年を迎え、次男が家業を継いで農業と漁業をいまも営んでいる。これは1995年の時点での調査による記述である。6月6日家族の見守るなか、早朝5時15分に息を引き取った。本土からの医者がちょうど島の診療所に詰めていた日だったので臨終まで診てもらうことができた。角島は浄土真宗の寺が3カ寺あり全戸がその門徒のためか、枕飯や魔除けの刃物など他の地域で一般的にみられる習俗がみられない。しかし、モージャ（亡者）を北枕に寝かせ枕元にローソク1本と線香1本を立てておくことや、湯灌のときに盥に先に水を入れておいてあとから湯を加えるやりかたで湯加減をして子供たちがモージャ（亡者）の身体を洗うなどのことは行なわれていた。葬式の日には友引きを避けるというのも同じである。しかし、葬儀の変化、簡略化も確実に起こってきている。湯灌はいまでは盥は使わずモージャ（亡者）を裸にして全身をタオルで拭くだけになっている。また、湯灌はむかしは死亡のあくる日に行なうもので、そのあとで納棺をして仏壇の前に安置しておいたものであった。しかし、今回の西田雪雄氏の葬儀では死亡当日の夕方に早くも湯灌と納棺を済ませており、夏という季節柄ドライアイス2個を添えておいた。かつて、湯灌と納棺とが死亡の翌日であったというのにはそれなりの理由があった。それは棺の用意をするのが講の役目であり、講は必ず死亡の当日ではなく翌日に集まる決まりがあったからである。角島では死亡当日の掃除や片づけや食べごとの用意などは、みんな家族で行なうのが決まりである。死後すぐにやって来て葬式の手伝いをするのは死者の子供たちで、子供が少なく手合いがないようなときには兄弟姉妹も手伝う。その食べごとではワカメを切ったり、団子も作る。葬式に団子はつきものである。お通夜の料理も家族の女性たちが作る。隣近所や講が寄ってくれるのは翌日になってからで、西田家の場合、隣近所の5軒は夫婦2人で来てくれて、講は部落と自治会と重なっており、その構成戸23軒の家が1人ずつ出て手伝ってくれた。角島は島の中央のくびれた部分を境に東北は元山、西南は尾山といい、元山は里と中村に分かれており、1区が里、2区が中村、3区が尾山、と計3区からなっており、それを古くからサンクロ（三畔）と言いつねわしてきている。西田雪雄家は2区の中村の野崎という部落（自治会）に属しておりその構成戸の23戸がそのまま講を構成して葬儀の手伝いをしてきている。こののち2000年に角島大橋が架橋されて本土とつながる前の1995年の調査当時は角島の戸数は約323戸であった。

その1990年代には、葬儀における講や隣近所の手伝いの部分が葬儀社の進出によって確実に減少してきていた。棺をはじめ葬具の大部分は葬儀社がセットで用意するようになり、古い仕来たりが失われ新しい作法も生まれてきている。たとえば、納棺に際して最近では生花を入れるようになったが、むかしはそんなことはしなかった。むかしは棺の用意も大変で、角島では棺の材料の杉の三分板が手に入らないので、死者が出たら本土の特牛港から船で運んで来なければならなかった。しかし、そのときシケ（時化）で船が出せないような場合には困るので、あらかじめ死者を出した家では次の死者のために葬儀の責任者である講長の家に杉の三分板を預けておくという決まりがあった。しかし、それもいまではもう昔語りになっている。火葬も、むかしは講が世話をして部落の各戸が割り木を1把ずつ出して焼いていた。ただし藁は喪家が出すものであった。それがいまでは火葬場でバーナーで焼くようになり、各戸が割り木を出すことはなくなった。形見分けもむかしは着物を分けるものだったが、最近では年金の貯えなどの中からお金や他の何かを買って分けている。

この角島に限らず、こうした葬儀の変化は1990年代の日本各地で起こってきていたのだが、そ

うした中で注意しておきたいと考えたのは、それまで地域ごとに伝承されてきていた伝統的な葬送の儀礼や作業の中のそれぞれ特徴ある伝承とその意味についてであった。たとえば、葬儀の手伝いについてもこの角島では死亡当日は家族と親族だけで行ない、隣近所や講は必ず翌日から参加するという決まりがある。そのような葬送儀礼の執行の上での、血縁（家族・親族）、地縁（村落社会）、無縁（僧などの宗教者・葬儀業者）の三者の作業分担をめぐる地域差が日本各地で存在することに、筆者のこれまでのわずかな民俗調査体験の中からも注意する必要があるだろうと考えてきていた。柳田國男が説いたように地域差によく注意しながら民俗伝承の意味を考えるとということの重要性は、両墓制の分布の問題に取り組んできた自分の調査体験からもその有効性は確信されていた。

(5) 喪主がみずから墓穴を掘る

そうした中でとくに注目されたのが、古い報告ではあったが次のような記事であった。昭和14年（1939）、鈴木棠三が『ひだびと』7巻9・10号に発表した「陸中安家村聞き書き」にある「墓は、喪主が葬礼の前に必ず現場に行き、墓所に白紙をおき、五竜の位置をきめ、二鍬ばかり掘る。これをヤシキトリといっている」という記事である。喪主が墓穴を自ら掘るというのである。一般に、葬儀は村落内の組とか講などと呼ばれる近隣組織が中心となって執行されるもので、地域社会の相互扶助の慣行が最もよく表されている民俗事象であると民俗学では理解されてきた⁽¹⁷⁾。実際、死者が出るとすぐに隣近所に知らせ、そこからすぐに組や講に知らされて、その近隣集団が葬儀の執行を中心的に行なってきた例が多い。そして、喪家の家族や親族は葬儀には口出しはできぬもの、組や講の世話になるものとされてきた。そして、それが日本の伝統的な葬儀執行の基本的形式であると考えられてきた。しかし、この鈴木棠三の報告した陸中安家村の事例はそうした理解に真っ向から疑問を提示しているものであった。

(6) 比較研究の視点の必要性

なぜ、この重要な報告がその後の民俗学研究の展開へと結びつかなかったのか。柳田國男が力説していた比較研究の視点が戦後の民俗学の歴史の中でしっかりと実践に活かされてこなかったことが悔やまれる。柳田のいう民間伝承の学がその特徴とするのは重出立証法という視点と方法であり、それが文献史学の単独立証法と明確に対比されるものである。日本各地の民俗伝承というのは個別事例の調査研究だけではその意味を明らかにできない、いくら精密であっても一つのケーススタディだけではその民俗伝承の発信している歴史情報を解釈することはできない、だからこそ民俗伝承の資料価値を高めるためには日本各地のなるべく多くの事例を調査収集してそれを持ち寄りあい相互に比較しあうことによってそれぞれの個別情報が発信している歴史情報を立体的に読み取ることができるのだというのが前述のように柳田の主張であり、重出立証法という視点と方法の提唱⁽¹⁸⁾だったのである。

そこで、葬送の作業分担をめぐる死者との関係の上での、「血縁（家族・親族）・地縁（村落社会）・無縁（僧などの宗教者・葬儀業者）」という三者の関与のあり方について、地縁的關係者が中心という1960年代までの日本各地でもっとも一般的であった事例から、血縁的關係者の関与が中心だという従来あまり注意されてこなかった事例まで、その両極端の事例が存在するという一定の幅の

中でその中間的な事例も視野に入れながら、たとえばここに4つの事例を選んで紹介してみることとする。第1は、地縁中心の広島県山県郡旧千代田町域の事例である。アタリと呼ばれる隣近所の数戸と講中と呼ばれる近隣集団の10数戸～20数戸が葬儀の中心的な作業を執行して、死亡当日の最初から葬送の最後まで家族や親族は一切手出しせずに死者に付き添うのみという事例である。第2は、地縁中心ではあるが死亡当日だけは家族や親族などの血縁的関係者が葬儀の準備をするといういま紹介した山口県旧豊浦郡豊北町角島の事例である。死亡当日の第1日目だけは葬儀の準備をすべて家族と親族とで行ない、2日目から隣近所の数戸と講中と呼ばれる近隣集団の20数戸が葬儀の中心的な役割を分担するというものである。第3は、同じく地縁中心ではあるが遺体を扱う土葬の頃の墓穴掘りや埋葬、また火葬になってもその火葬だけは必ず家族や親族など血縁的関係者が行なうという新潟県中魚沼郡津南町赤沢の事例である。ヤゴモリと呼ばれる近隣集団が葬儀を執行してくれるが、埋葬や火葬だけは死者の子供が中心となって行なうという事例である。第4は、葬儀は血縁的関係者が中心となって執行するものと決まっているという先に鈴木棠三が記していた岩手県下閉伊郡岩泉町域の事例である。食事の準備から野辺送りまで葬儀の作業の主要な部分はすべて家族、親族が担当して、近隣集団には補助的な役割だけを頼むという事例である。

これらの事例のうち、たとえば新潟県中魚沼郡津南町赤沢では、土葬、火葬いずれの場合でも棺担ぎや穴掘り、そして埋葬や火葬を行なう中心人物はむかしから子供や甥や姪など家族や親族に決まっているといい、岩手県下閉伊郡岩泉町の安家や岩泉でも、食事の準備、野辺送り、埋葬など、葬儀の主要な部分は身内がやらないで誰に頼めようか、とさえいっていた。葬儀は組や講などの近隣集団が中心になって行なうものと考えてきた人たちからすれば驚くような話である。しかし、高度経済成長期以降の大きな葬送習俗の変化の中でこのような葬送習俗の地域差は曖昧化されていくこととなった。葬儀業者の担当部分が増加していったからである。しかし、逆にそのような葬儀の変化が加速していった時期の1990年代の民俗調査によって聞き取ることができたのが1960年代までそれぞれの地域社会で伝統的であった葬送習俗のあり方であった。そしてその中では、葬儀は家族と親族が中心となって執行すべきものだという地域が日本各地で少なくないことがわかってきていたのである。以下、1990年代の民俗調査であればこそ得られた情報であり、2010年代の現在の調査では追跡できなくなっている情報でもあるので、学史的な意味からもここに提示しておくこととする。

②……………伝統的な葬儀とその担い手—1990年代の調査情報から

ここでは以下1990年代の調査による4つの事例情報をまず紹介しておくことにする。

事例Ⅰ 広島県山県郡旧千代田町域の事例

(1)葬儀と寺

これは1990年代の調査による情報である。寺と住職の役割について旧千代田町本地地区の専教寺の例でみてもみる。この旧千代田町本地というのは中国山地の脊梁部に位置している標高約270mの高原盆地に古くから開けた典型的な中山間地農村である。その地名がみえる古い記録は『倭名類

聚抄』(931～938年頃成立)で、安芸国山県郡の中の郷の名前に品治(本地)の名がみえる。この本地地区の葬儀では門徒や化境の家で死者が出るとまずは寺へ知らせがくる。かつてはその知らせの役目にあたった人が寺に来て知らせたが、今では電話で知らせが寺に入っている。化境というのは安芸門徒の間でみられる独特の組織であり、それぞれの寺の地元の家々のことをいう。そして講中と呼ばれるものと同じである。それぞれの寺の門徒は地元にかぎらず広く各地に広がっていて地域ごとにまとまっていないため、地縁的な地元の講中の家々のまとまりが家々からいえば講中であり、寺からいえば化境であるということになっている。この化境の成立の歴史については、あとで③の(2)の「安芸門徒の講中と化境」においてあらためて解説する。

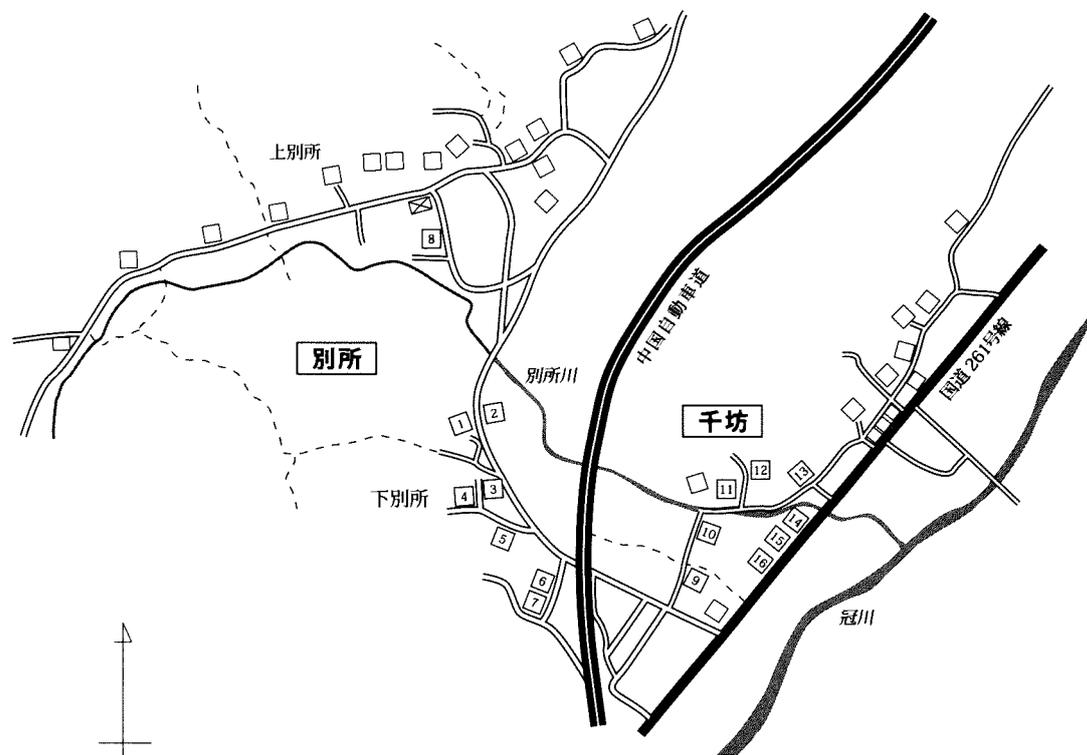
住職は葬儀に呼ばれると用意をして喪家に行き死者の枕元で枕経をあげる。それを臨終勤行という。これは住職がひとりで行く。その夜が通夜となる。葬式当日には、2カ寺案内とか3カ寺案内といって門徒寺や化境寺など複数の寺の住職が依頼されてお勤めに行く。1カ寺で院家と伴僧と曲録とで少なくとも3人は行く。伴僧は荷物を運んだりいろいろと院家の手伝いをする者で、曲録は椅子を運ぶなどの雑用をする者である。葬式のお勤めは本山で指定したのがあり、表白文、正信偈、これらは葬式独特のあげ方がある。かつては読み方が5通りあったが今は3通りになっており、そのうち葬式独特の読み方であげる。念仏、和讃、回向供の順番にあげる。三部経、坊主焼香などもある。家族、親族、会葬者たちの焼香がすんで出棺となるが、このとき住職たちは十四行偈をあげる。これを出棺勤行という。むかしは部落ごとに焼き場があり、行列を組んで送っていったが、住職も焼き場まで行きそこでもう一度、葬場勤行といってお勤めをした。いまでは町営の火葬場ができて自動車で行くので、住職は葬場勤行は家ですませて火葬場には特別に依頼されない限り行かない。昭和30年代後半までは焼き場で葬場勤行をしていたという。翌日朝、ハイソウといって焼き場でお骨拾いをしたが、そのとき拾骨勤行もしていた。しかし、いまは拾骨勤行は先にすませてしまう。むかしは竹を編んで笊をこしらえ白紙をのせてその上にお骨を拾った。家によってはたくさんの骨を拾うこともあり、少しですませることもあり、骨をどれくらい拾うかはとくに決まっていなかった。拾ったお骨を墓石の下に納めるのも家によってそれぞれでその日のうちに納骨する家も、四十九日の法事のときに納骨する家もあったという。いずれの場合にも住職は立ち会って納骨勤行をした。四十九日の法事にあげるお経にはとくに決まりはなく、阿弥陀経などをあげる。

(2) アタリ・部落・講中

部落と講中 葬儀の執行と、近隣、親類、寺との関係について、具体例として本地の別所部落の桐原玄三家の場合でみる。桐原玄三家にとって門徒寺は遠隔地の可部地区にある西光寺であり所属する部落は別所である。しかし、講中は別所部落ではなく千坊部落の家々と一緒になっており千坊講中と呼ばれる講中に属している。なぜそうなっているのか。それは別所部落が同じ部落であっても上別所の16戸と下別所の7戸の二つに分かれており、上別所の16戸が専教寺の化境下となって別所講中を構成しているのに対して、下別所の5戸は上別所とは別で隣の千坊部落と同じ浄楽寺の化境下となっているからである。いま下別所にある家は7戸であるが、そのうちの2戸は上別所の講中で専教寺の化境に属しておりいずれも大正期の転入戸や加入戸である。この本地地区の特徴は、第1に、門徒寺が地元のその3カ寺だけでなく、遠方の広島市内の報専坊をはじめとするこの

本地から離れた地区にある寺を門徒寺としている家が多いという点である。第2に、地元で専教寺、浄楽寺、浄専坊⁽¹⁹⁾という3カ寺があり、それぞれの寺の化境が部落ごとにまとまっているかたちではなく、同じ部落であってもその3カ寺もしくは2カ寺の化境の家が混在しているという点である。それは、化境つまり講中と部落とがもともと別のものであったからであり、地元の3カ寺が近世を通じて把握してきた化境つまり講中というまとまりと、近代にあらためて行政的に把握され編成されてきた部落というまとまりが、それぞれ別の歴史的背景をもつものであるということをもしるこの本地の例はよく表わしている。

さて、別所部落に所属しながら千坊部落の千坊講中に所属する桐原玄三家の場合、化境寺は地元の浄楽寺である。その千坊講中は次の家々からなっている。



地図1

表1 部落と講中

(桐原玄三家が所属する部落は別所部落，所属する講中は千坊講中，その千坊講中に所属する家々は下記の通り。なお，古川部落・森藤部落・広能部落の家も1戸ずつ含まれている。)

別所	1. 桐原玄三	(門徒一可部の西光寺)	化境一浄楽寺)
別所	3. 砂原照三	(門徒一可部の西光寺)	化境一浄楽寺)
別所	4. 砂原一之	(門徒一可部の西光寺)	化境一浄楽寺)
別所	5. 宗政ミスエ	(門徒一浄専坊)	化境一浄楽寺)
別所	6. 大田 等	(門徒一浄専坊)	化境一浄楽寺)
千坊	9. 沖野広司 (賢治)		
千坊	10. 沖野二三夫		
千坊	11. 桐原 潔 (清見)		
千坊	12. 高原サフミ (正記)		
千坊	13. 玉広泰治		
千坊	14. 高原三郎		
千坊	15. 高原和彦		
千坊	16. 高原 浄		
古川	17. 大林又一		
森藤	18. 行宗一彦	(門徒一可部の西光寺)	
広能	19. 斎藤友一	(門徒一可部の西光寺)	

アタリ これに対し，葬儀で最も重要な手伝いの仕事をしてくれるのはアタリ（辺り）と呼ばれる最近隣の家数戸である。それは次のような下別所の近隣の家々である。専教寺を化境寺とする別所講中の家も3戸含まれている。

表2 アタリ (桐原玄三家にとってアタリの家々は下記の同じ別所部落の家々である)

1. 桐原玄三	(門徒一可部の西光寺)	化境一浄楽寺)	
2. 岩崎正司	(門徒一寺原の西光寺)	化境一専教寺)	* 大正期に本地の市からこの屋敷を買って転入した
3. 砂原照三	(門徒一可部の西光寺)	化境一浄楽寺)	
4. 砂原一之	(門徒一可部の西光寺)	化境一浄楽寺)	
5. 宗政ミスエ (春雄)	(門徒一浄専坊)	化境一浄楽寺)	
6. 大田 等	(門徒一浄専坊)	化境一浄楽寺)	
7. 細田トキエ (康則)	(門徒一寺原の西光寺)	化境一専教寺)	* 戦時中に部落が別所だから一緒になった
8. 粟谷マサコ	(部落は新栄)	化境一専教寺)	* 大正期に家数が少なくなって一緒になった

千坊講中のお寄り講 安芸門徒の間では毎月1回のお寄り講がある。日取りは特定の日はなく当番の家で都合をみて決める。当番は月毎に家の並びの順に回ってくる。この講中の当番のことをガチという。月行事の略語であろう。時間はふつうは夕飯時で冬は昼食時にする。化境寺の住職に

きてもらい、お経をあげてもらい法話を聞く。オトキ（お斎）が出る。講中で共有の膳と椀がありそれを使う。膳に盛られるのは親の椀と呼ばれる椀に御飯、それに汁椀、おひらに大根、コンニャク、昆布、人参、ゴボウなどの煮しめ、おつぼに小豆と一緒に田芋などを煮たもの、そして中央に大根なますである。おひらの蓋には豆腐の白あえやてんぷらなどを付ける。お寄り講はオトキ（お斎）をいただいて終わる。住職へのお礼は米1升である。

(3) 葬儀

遺体 家の間取りではカムデイ（上出居）が仏間になっている家がほとんどで、遺体はまずその部屋に布団を敷いて寝かせる。最近では病院で亡くなる人がほとんどで亡くなったらすぐに死者の手を組ませ、車で家に連れて帰ってから数珠をかけることが多い。床柱と仏壇の方に顔を向けて寝かせ、枕元に線香、ローソクを焚いておく。夜もその火は消すなという。交替で起きていて誰かが見守る。「極楽へ行く道が暗うちゃあいけん、見えんといけん」、などという。

テイスヤク（亭主役） 家の者が死亡するとすぐに隣の家へ知らせる。すると、アタリ（辺り）へはツギブレ（次触れ）といって次々と隣の家に知らせてくれる。アタリはいわゆる2人出で、夫婦2人が手伝いに出る。そのなかからテイスヤク（亭主役）が選ばれてそのテイスヤク（亭主役）を中心に葬儀の日取りや役割り分担が相談される。親類への知らせに行く者、寺への案内に行く者、医者^の診断書や役場からの火葬認可証をもらいに行く者などが決められる。

ヒキヤク（飛脚） 1960年代までは親類への通知はアタリから出てくれた若い元気な者が2人選ばれて歩いて行った。この役をヒキヤク（飛脚）といって必ず2人でなければならない。昼でも夜でも晴れでも大雨でも行かねばならない。ヒキヤク（飛脚）は、「だれそれが死んだ」という言い方はせず、「いついつひけた」という言い方をする。ヒキヤク（飛脚）を迎えた家では必ず御飯を食べさせる。だから、いつヒキヤク（飛脚）がきてもいいように、どこの家でも釜には米をしかけておくものだったものである。御飯をすぐに炊くがそれで手間がかかって遅くなるのは女の恥だといって急いで支度した。おかずは漬物とお汁でよい。熱い御飯が出されるので、「猫舌の者にはヒキヤク（飛脚）はつとまらん」といったりした。親類でも親子兄弟のような近い親類では、ヒキヤク（飛脚）を帰すと、餅米を水にかして餅を搗く用意をする。葬式の後のシアゲ（仕上げ）の膳でアタリの家をもてなすときに膳に付ける餅はこの近い親類が搗いて持ち寄るのである。慶びのときの餅は中に餡を入れるが葬式のときの餅は中に餡を入れない。

1990年代の最近では親類その他への知らせは電話を使うようになっている。テイスヤク（亭主役）が喪主に相談して通知すべき所を確認してから電話をする。最近では葬具は葬儀屋がかなりの部分を準備するようになってきている。香典帳や買い物帳も出来合いのものを用意しているし、会葬御礼の礼状その他のセット、それには砂糖やお茶、祝儀不祝儀用ののし袋などが入れられているが、それらも葬儀屋がセットで用意している。生花もそうである。最近では葬儀の行なわれている間に生花を棺の周りに置いて飾りにしておき出棺のときその生花をちぎって会葬者が棺に入れて最後の別れとすることが行なわれるようになってきているが、その生花を用意するのも葬儀屋である。むかしはそんなことはしなかった。

枕経 寺への案内は米1升を持って行く。頼む寺はこの本地地区では遠隔地の門徒寺ではなく近

くの化境寺である。その化境寺の住職が喪家に来て枕経をあげてくれる。死者は布団に寝かせられ、枕元には経机がおかれ線香がたかれる。枕経は比較的短いもので住職が喪家の家族と一緒にこの地域の浄土真宗のしきたりにそって仏壇の阿弥陀仏に向かってあげる。

通夜 通夜は家族、親類などの身内とごく懇意の人だけが集まる。アタリの人たちは葬式の準備で忙しい。講中の家からはこの通夜の晩にみんなクヤミ（悔やみ）に来る。講中への触れはガチと呼ばれる当番が行ない、ガチが講中の香典として決められている1戸あたり米3合ずつを集めて喪家に届ける。

湯灌・死装束・納棺 葬式の前の晩に死者の湯灌をし、白い死装束を着せて棺に入れる。湯灌は死者を裸にして盥の中へ入れて洗うもので相当の力が要る。兄弟姉妹や子供などごく近い身内が死者の身体を手ぬぐいで洗う。アタリの者など他人はそれを心安げに覗いてみるものではないという。死装束は身内の女性が縫う。白い晒布はアタリの者が買ってきてくれる。鉋を使わずに布は手で裂き、糸の端をとめずに縫う。死装束を着せると死者が若い女性の場合などうすくお白粉をぬるなどして死に化粧をすることもある。僧籍にあった人は白衣の上に黒い着物を着せる。1945年の終戦の頃から寝棺になったが、それまではずっと坐棺だった。山桶と呼ぶ丸い深い棺桶でそれに死者を座らせて入れた。お茶の葉を下に敷いた。ほかに入れるものはとくになかった。

棺桶と輿 棺桶の上にかぶせる輿はなかなか手の込んだものでこれを作るのはたいへんだった。この千坊講中ではいつの頃からか自分たちで作るのはやめて大工に作ってもらったものがあったといい、それは黒い漆塗りで藤さがりの紋に、金色、赤色、白色など色鮮やかな立派なものだったという。まわりに欄干をめぐらし、屋根の先の四隅がそれぞれ上向きになっておりそこには鶴がとまるかたちになっていたという。それがヤキバ（焼き場・火葬場）の倉庫に納めてあり葬式が出るたびにそれを使っていた。輿のまわりには青い空色の布と白い布をぐるりと巻いていた。その布は棺を担いだ人にあとであげる。

読経と焼香 読経と焼香は、家とヤキバ（焼き場・火葬場）とで2回行なった。家ではカムデイ（上出居）と呼ばれる部屋で行なった。カムデイ（上出居）にはふつう床の間と仏壇がある。床の間の前あたりに棺桶を据えて仏壇を開け、寺の住職がお経をあげる。寺は2カ寺案内とか3カ寺案内などといって門徒寺や化境寺の住職など複数の寺の住職を招く。喪主の門徒寺と化境寺、それにその他の喪主の兄弟姉妹たち、故人の子供たちがそれぞれの関係の寺を依頼することもある。子供たちが一緒に1カ寺を頼むこともある。1カ寺で院家と伴僧と曲録と大傘とをあわせて4人で、よく「上下四人」などという。伴僧は荷物を運んだりいろいろと院家の手伝いをする者で、曲録は椅子を運ぶ、大傘は傘をもつなどの雑用をする者である。お礼はだいたい住職にもとは米1石、今は3万円くらいである。仏壇ではふだんと同じように御飯が供えられている。棺の前には壇を設け線香、抹香、ローソクが焚かれ、シカバナ、生花、葬式菓子などが供えられる。葬式菓子というのは、提灯の骨の竹ひごのような形でその先に赤青黄色の米で作った菓子を先にさしたものである。この葬式菓子は葬列とともに焼き場まで持って行き子供たちに分け与える。お経が続けられ、終りに近づくと家族、親類が順番に焼香する。会葬者には焼香台を盆へ乗せて回す。棺桶は縁側から担ぎ出す。棺桶の中に納めた輿である。担ぐのはアタリの者で、力が要るので若い元気なものが4人で担ぐ。担いだ人は輿に巻いてある布をもらえらる。青い布は花田植えのときの帯や襷にする。

葬列 喪主の服装は昭和の初めころまでは袴^{かみしも}だったが、その後、紋付き羽織袴になった。火葬場へ行くのを「野へ行く」というが、火葬場へ送って行くときは、死者の子供たちはみんな裸足に紙緒の藁草履で、草履の緒には白いもろくちを巻いておいた。嫁も婿もそうする。身内の女性はみんなボウシ（帽子）と呼ぶ白い布を被る。葬列の順番は、およそ次の通りである。

灯笼—棺—シカバナー—生花—線香—ローソク—住職—喪主—家族—親類—講中や友人

灯笼をはじめとする持ち物はすべてアタリの人たちが手分けして持つ。アタリの者のうち女性はオトキ（お斎）の準備で台所仕事が忙しく、ヤキバ（焼き場・火葬場）には行かない。男性のうち帳場の係は喪家に残ってそれ以外の者が葬列に参加する。

ヤキバ（焼き場） どの部落でも山に入ったあたりにヤキバ（焼き場・火葬場）をもっていた。葬列がそのヤキバ（焼き場・火葬場）に着くと、そこでもう一度、野辺の送りといって読経と焼香をする。そのあとで焼くのは棺を担いだ者である。焼く場所は丸い堅穴状に掘ってあり回りに土手をめぐらせてある。風が吹くと危ないからである。まず下に藁を敷き薪を並べる。経験者が中心になって作業を進めはじめての若者はそれを見習う。薪の上に棺桶をおき外から薪を縦に立て掛けるようにめぐらす。藁をぎっしりとたくさん積み重ね高く盛り上げる。薪よりも藁の方が多い。藁の火力はなかなか強いものだという。焼きは始めるのはふつう夕方である。最初に火を付けるのは喪主である。それに続いて家族と親類の主だった者もつぎつぎに火を付ける。藁を束ねて棒状にしたものを何本か用意しておきそれで火を付ける。最後には焼く係りの人が全体のバランスをみて適当なところへ火を付ける。燃えはじめたらみんな帰る。焼く係りの人もまもなく燃えはじめたのを確かめたらいったん帰る。

オトキ（御斎）の膳 喪家に帰ったらみんなでオトキ（お斎）の膳に付く。そして、夜中の10時過ぎごろに焼く係りの者が一度焼け具合を見に行く。うまく焼けていればそれでよし、直すべき所があれば直してくる。この時よく語られるのは、いついつ誰々のときのことだが云々、というパターン化された話である。棺桶の中に死体は座らせる形にしてあるが、焼くと死体はのびるもので、ちょうど誰々が見にいったときのこと、棺桶の竹の輪が焼けてバラバラになり手足が火の中から急に飛び出してきて肝をつぶした、というような話である。焼け具合を見にいったら帰ると、うまく焼けていようがないが、「ええ具合に流れとってです」という挨拶をするものだという。

骨拾いと納骨 翌朝、喪主夫婦をはじめ家族、親類一緒にヤキバ（焼き場）に骨拾いに行く。アタリの人も行くと。親類はみんなかつては葬式の晩は喪家に泊まったものである。遺骨は麻殻^{おがら}を箸にして拾う。喪主から順番に、それも頭の骨からみんなで少しずつ拾っていく。拾った骨はもろくちなどの紙の上に置く。その紙に包んで持って帰ったり、藁スボに入れて帰ったり、土のオイコ（背負い子）を持って行ってそれに入れてくることもあった。遺骨と遺灰は全部拾うわけではない。粉になった遺灰は焼き場の周囲に捨てる。焼き場の隅の一角にはそのような遺骨灰が捨てられて山のように盛り上がっているところがあった。遺骨を拾って帰ると、仏壇の前に置き、寺の住職にも来てもらいお経をあげる。アタリの者もまいる。住職は地元の化境の寺の住職で枕経をあげてもらった住職である。この時に浄土真宗でよく知られた蓮如の「白骨の御文章」が読まれる。その後、ハカツミ（墓積み）といって、墓地に住職にも一緒にいってもらい、墓石の下部のカロートへ遺骨を納める。

シアゲ（仕上げ）の膳 それが終わると、シアゲ（仕上げ）といって今度は親類のものがアタリの人たちをお膳でもてなす。この膳には親子兄弟などの近い親類が搗いて持ってきてくれた餅2重ねを付ける。葬式のあいだじゅう、ずっと食事はアタリの人たちが作ってくれてきたわけで、この時になってやっと親類の者たちがもてなすかたちで、アタリの人たちにお膳についてもらうわけである。葬式の間の献立は、煮しめ、豆腐汁、あらめに油揚げ、すと豆腐、それに漬物などである。あらめは必ずといってよいほどこの地域の葬式の食事には出る。すと豆腐というのは麦藁の藁づとに豆腐を入れて巻いて茹でたもので、切って出すが切り口には胡麻をふる。おかずについてはいろいろあってもとにかく漬物さえあれば大丈夫だった。それより、とにかく葬式には米をたくさん炊いて食べてもらうというのが特徴であった。葬式にはほんとうに米がたくさん要ったという思い出を持っている人は多い。近所の子供たちの思い出にも、大きな釜で炊いたご飯の狐色のおこげをもらいに行った思い出を懐かしむ人が多い。

法事 葬式が終わると、初七日には寺へ参る。化境の寺である。お経をあげてもらい御法礼とローソク料として米1升かそれに代わるお金を納める。そうして7日ごとに寺に参る。法事は男が四十九日、女が三十五日で、寺、アタリ、親類を呼び、住職にお経をあげてもらい、法話を聞き、オトキ（お齋）をみんなでいただく。その後は、3年忌、7年忌、17年忌、50年忌である。特別に寺と契約すれば月忌参りもしてもらえるが、それは必ずしも一般的ではない。永代経供養を寺に頼んで先祖の供養とすることは多い。

講中にすべて一任 以上がかつて昭和40年代（1965～75ころ）まで行なわれていた葬儀と火葬の方式である。1995年の調査時点の現在でも葬儀はアタリと講中が中心になって行なうもので家族や親類は一切口出しをしないというのが決まりである。講中のうちに親類がある場合には親類は身内の扱いとなり、葬儀の手伝いもしないし、座敷を貸したりもお寺さんの宿もしない。家族や親類は葬式の日取りも呼ぶ寺も一切口を出さずすべて講中に任せる。喪主に相談すべきことがあれば、それはテイস্যク（亭主役）の判断で相談することもあるが、ふつうは講中へすべて一任である。

事例Ⅱ 山口県下関市豊北町角島の事例

(1) 講と寺

これも1900年代の調査による情報である。角島は響灘の中に位置する島で、直径4.4km、最大幅2km、最小幅300m、面積4.3km²の、中央がくびれ両端が突出した牛の角のような形の島である。島は中央のくびれた部分を境に東北の元山と西南の尾山に分かれており、元山は農業主体、尾山は漁業主体の集落である。元山は里と中村に分かれており、1区が里、2区が中村、そして3区が尾山、となっており、古くからサンクロ（三畔）と言い慣わしてきている。その3区の下に計13の自治会があり、元山の里に西迫・仮島・辻方の3つ、元山の中村に岡方・前方・後方・野崎の4つ、尾山に黒瀬・辻ヶ浜・久保・堂の奥・河原・森の前の6つがある。それらは13の部落と呼ばれてきたが、昭和50年（1975）に自治会と呼称変更がなされた。しかし、いまでも部落という言い方をする人が多い。この部落（自治会）が葬儀の手伝いをする講と重なっている。ただし、戸数の多い黒瀬と河原は講が2つに分かれている。講はコーウチ（講内）とかシニコウ（死講）と呼ばれて葬式に集まり手伝いをする組織となっている。講には講長1名と会計1名がおり、講長が葬儀委員長となっ

て葬儀を取り仕切る。講の男性は棺や輿を作り、シカバナや蓮の花などの飾りを作り、祭壇や会場の設営、棺担ぎや火葬などを担当する。講の女性は団子作りや台所仕事をこなす。寺は西本願寺派の浄土真宗の寺院が尾山の堂の奥の勝安寺、尾山の辻ヶ浜の浄楽寺、元山の辻方の徳蓮寺と計3カ寺あり、角島の家々はほとんどがいずれかの寺の門徒である。すべて地元の寺の門徒なので、同じ浄土真宗であっても前述の広島県の安芸門徒の事例でみられたような化境^{けきょう}という制度はない。また、神社としては角島八幡宮が元山にあり、島内全戸がその氏子である。本土と角島を結ぶ町営の定期連絡船角島丸が通っており、特牛港^{こつとい}と角島の尾山港との間の渡航時間は約25分である。平成7年(1995)の調査時点での戸数は323戸であるが、来たる2000年にはこの角島と本土とを結ぶ角島大橋の建設が計画されており、それによって自動車で本土とつながることとなり、それにとまなう大きな変化が予想される状態であった。

(2) 葬儀と供養

葬儀と講 葬儀における講の役割は大きい。講の役割には大きく分けて家を新築する時の手伝いと葬式の不幸の時の手伝いの役割の2つがある。葬式の時には講長が葬儀委員長として講の人びとに呼びかけ、責任と権限を持って葬式の準備をする。島の人びとにとって講に参加することは大切な義務であり、たとえ仕事があっても講に参加する。不参加が続くと、講バネとなる。講バネというのはみんなが恐れるもので一切の付き合いを止められる村八分のようなものである。

前述の広島県西北部の安芸門徒の事例では死者が出たらすぐにアタリや講中の家々で葬儀を執り行なうしきたりであったが、この山口県の角島の事例ではモージャ(死者)が出た当日は講の人たちはまったく働かずに、死亡当日はモージャの家族と親族がすべて準備などをするのが決まりである。講の手伝いは死亡の翌日からでそれから一斉に準備をする。講は昭和35年(1960)頃まで、棺や棺を担ぐための輿、シカバナやカジメなどの飾りなど、葬儀に必要なもの一式すべてを作った。飾りは現在(1995年の調査時点)も作っている。

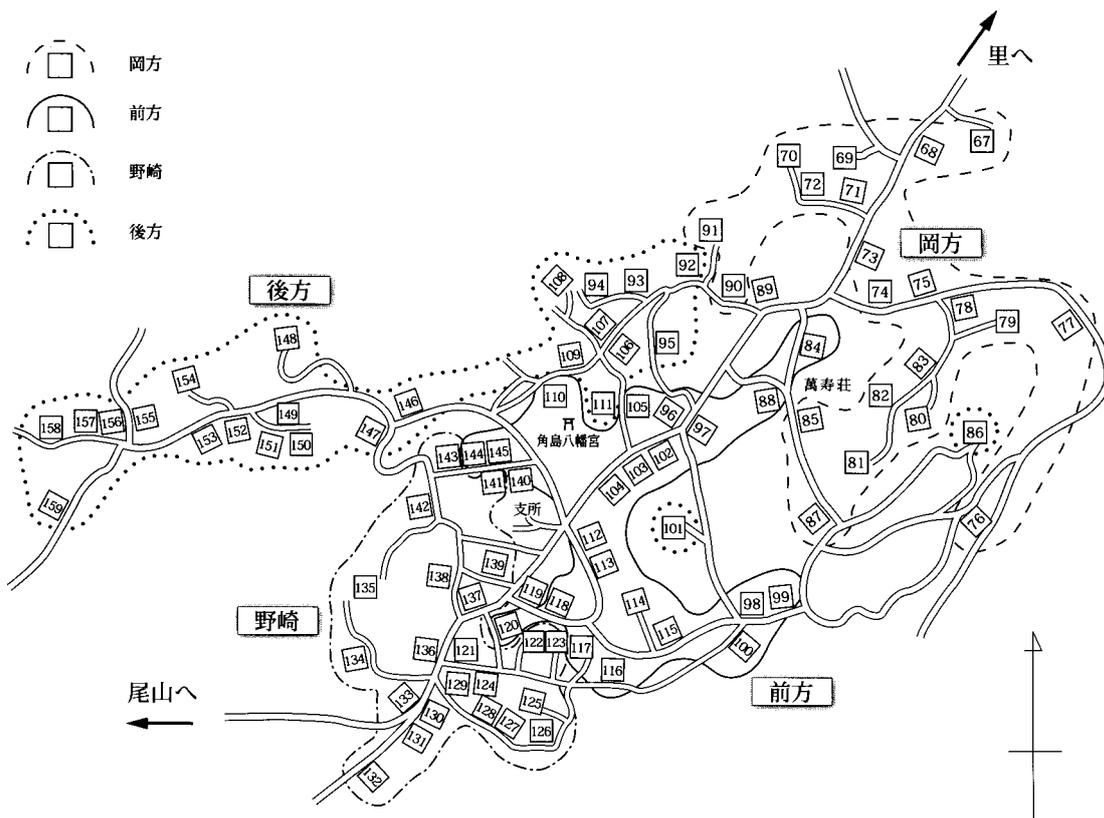
団子を作るのは家族や親族だがその団子を串に挿して供え物を作るのは講のしごとである。野辺送りでは棺を担いで寺に運ぶのも講の者の役割である。火葬する時はその準備を整え、遺体が完全に焼けたかどうか確認して親族に報告する。火葬場で火葬するための段取りを整えるのは講だが、実際に火を付けるのは親族である。また、講の服装は普段着でよいなど、家族や親族からは一線を画している。角島では地域の中に血縁関係にある家どうしも多く、モージャの血縁であり講でもある場合には血縁の立場を優先する。一応、準備にかかる朝、講の会合には顔を出すのが親族の立場をとる。講でもありモージャの家と隣近所の場合には、隣近所としての付き合いの方が優先される。モージャと2つ以上の関係がある場合には親族や隣近所といういちばん近い関係の方が優先されるのである。たとえば、先に①の(4)の「葬式と講中の世話」で紹介した西田雪雄氏の葬儀の場合には、講と部落は次のような元山の野崎部落の23戸で、隣近所はその次に記した5戸であった。

表3 講と門徒寺

講(部落・自治会)	門徒寺	講(部落・自治会)	門徒寺
119 刀禰田佑志	西楽寺	121 津田修三	勝安寺
123 北野巖	徳蓮寺	125 山内倉一	徳蓮寺
127 林 和美	勝安寺	129 国本広治	勝安寺
<u>131 池本 和</u>	勝安寺	<u>133 中尾 環</u>	徳蓮寺
<u>135 大田幸作</u>	勝安寺	137 吉岡翫二	徳蓮寺
139 岡村勝美	徳蓮寺	142 坂本嗣典	徳蓮寺
120 中川 久	徳蓮寺	122 池本良人	勝安寺
124 白石善夫	徳蓮寺	126 永富善治	徳蓮寺
128 坂本一三	徳蓮寺	<u>130 上田 功</u>	勝安寺
132 池本エミ子		134 西田重美	勝安寺
<u>136 永富俊和</u>	徳蓮寺	河野 博昭	勝安寺
池本 谷彦	勝安寺		

表4 隣近所の5戸(夫婦2人出て手伝う)

130 上田 功	131 池本 和	133 中尾 環	135 大田幸作	136 永富俊和
----------	----------	----------	----------	----------



地図2

ヨビツカイ（呼び使い）と枕経 カラスがシラク（鳴く）と人が死ぬという。迷信だといってあまり気にしないという人も多い。死者のことをモージャ（亡者）と呼ぶ。家族と親族とでモージャを北枕に寝かせる。ヨビツカイ（呼び使い）と呼ばれる男性の親族2人が講長や親族や門徒寺に歩いて死を知らせる。寺には「枕直しをお願いします」と言いに行く。門徒寺の住職がモージャの家に来て枕経をあげる。ヨビツカイをしている間、親族の女性はオツパン（御飯）を3合ほど炊く。茶碗にご飯を盛るが、そこに箸をさしたりはしない。死者は北枕にして枕元にローソク1本と線香1本を立てる。線香は普通の長さのものを3本程度半分に折り横に寝かせる。決して縦には差し立てない。枕飯は作らないで、仏壇へオツパン（御飯）をあげる。他の所でよくみられる布団の上におく魔除けの刃物もここではしない。浄土真宗の門徒だからだという。枕経が終わると、住職が位牌に戒名を書く。この戒名は京都の西本願寺へ参った時や、西本願寺の住職が来島してカミソリを頭にあてるオカミソリという儀式をした時、あるいは門徒寺の住職に生前あらかじめ付けてもらったものである。浄土真宗なので男性は信士、女性は信女が一般的だという。

湯灌 多くは死亡当日の朝、モージャ（死者）に一番近い家族や親族の者が家のオクノマ（奥の間）で行なう。むかしは死亡のあくる日に湯灌をした。湯灌は死者の子供たちが行なう。盥で先に水を入れたあとで湯を加えて湯加減をして裸にした死者にその湯を使わせた。水に湯を加えるのはふだんとは逆に普通はしてはいけないこととされていた。身体を拭くだけの場合は、盥を逆さに置き、その上に遺体を据えてタオルなどで拭く。湯灌をする人は、ドンダという緋などの着古しの着物を左前に着て、帯の代わりに藁や縄で左巻きに結ぶ。湯灌に使用したドンダや藁や帯は7日目に焼いて始末する。盥の湯は家の後ろの肥えタゴの中に7日間くらい入れておいて人目につかない太陽の当たらないような所へドロ（土）を掘って穴をあけそこへ埋めた。昭和5年（1930）頃まで、「一人一剃り一拭き」といって湯灌の時に性別に限らずモージャの毛髪を剃った。剃った毛髪は棺の中に入れた。昭和30年（1955）頃までは妊婦に死人を見せたり触らせるとウブシの子（口のきけない子）が生まれるといわれて妊婦が湯灌に携わることはなかった。いまでも妊婦は湯灌には参加しない。

死装束 死装束をジツクと呼ぶ。昭和55年（1980）頃までは、亡くなったらすぐに白い晒し布を用意して親族の女性たちが通夜の晩に死装束を作った。額に付ける三角の布、手甲、脚絆も作った。その際、ハサミを使わずに布は手で裂いた。着物の形にするために、脇の部分は縫い合わせた。袖の部分は縫わなかった。ジツクの上にモージャ（死者）が一番好きだった着物や良い着物を着せた。また浴衣の上に白い布を裂いたちゃんちゃんこのようなものを着せることもあった。

納棺 湯灌の後、死装束を着せて棺に遺体を納める。棺は竖棺で昭和35年（1960）頃までは、棺とそれを担ぐための輿をコーウチ（講内）やシニコウ（死講）と呼ばれる講の男性たちが、納棺に間に合わせるように作っていた。納棺の時には、モージャの手と手を合わせた間に、木や水晶のできた数珠を握らせる。鼻や耳に脱脂綿などの詰め物はしない。「死んでしまったら、モージャは藁と同じだから」といい、死後の世界へ旅立つための刀やお金などは棺には入れない。ただ一文銭を入れるという人はいた。昭和30年（1955）頃から昭和40年（1960）頃の間次第に寝棺に移行していったという。寝棺になってからは講は棺を作らず、業者から購入するようになった。納棺が済んだら、カミノマ（上の間）に安置しておく。

棺の用意 棺は最近では葬儀屋が他のものと一緒にセットで用意するが、むかしは死者を出した

家で杉の三分板を用意して講長の家へ預けておくしきたりがあった。角島は島なので杉の三分板は島内では手に入らない。しかし、死者がでると棺はすぐに作らねばならない。だから本土の特牛港から材木を船で運んで来るのだが、そのときもしもシケ（時化）で船が出せないようなことがあったら困るので、そのようなときにも対処できるように杉の三分板を用意しておくしきたりができていたのだという。

通夜 通夜のことをヨトギ（夜伽ぎ）と呼ぶ。かつては灯した油の火が絶えないように、モージャに近い親族が一晩中起きているだけのものだった。現在は親族がおおぜい海苔や缶詰などの乾物を持参して訪れ酒を飲んだり果物や菓子などを食べて過ごす。

帳場と香典 帳場は親類の者がそれにあたる。3人なり5人なりが出てつとめる。葬式の当日の朝から、ジゲジュウ（地下中）つまり同じ1区から3区まであるそれぞれの区の家々から人びとが続々とお悔やみに訪れる。その時には、ふだんの地味な服装で香典を持って来る。玄関からニワ（土間）に入り、オモテ（シモ）の間で焼香をする。平成6年（1994）に86才で亡くなった男性の葬式を例としてみると、同じ2区中村の人たちの香典は1,000円か2,000円、同じ部落の25軒ほどは10,000円から12,000円であった。他の1区の里や3区の尾山の家からはモージャとの個人的な関係により1,000円から3,000円、また5,000円であった。親族は10,000円から50,000円で、モージャの息子は100,000円であった。同じ区や部落の場合は一定の金額が決まっており、他の区や親族の香典の場合には個人的なそのモージャとの付き合いの疎密が反映されていた。

オトキ（御齋） 葬儀ではオトキ（御齋）という精進料理と食べる。オトキによばれる人は、モージャのイトコ（従兄弟従姉妹）、オジ（伯父叔父）、オバ（伯母叔母）、甥、姪である。むかしは昼にもオトキを食べていたが、現在（1995年）は午後7時半か午後8時頃の夜だけに食べる。場所はモージャの家からむかしは1軒おいた家だったが、現在は開発センターや公民館を利用する。テゴという隣近所の5軒ほどの手伝いの人が買ってきた材料で、親族やテゴの女性が料理をする。食べごとは身内の近い親戚と隣近所の5軒ほどの家がやる。料理の作業分担はとくに決まっていなくて、年配の人が主に作り、それを若い人が手伝いながら覚えていく。テゴの人たちもその精進料理を食べる。

講内の食事は、ショシモト（喪主）が、あらかじめ2俵から3俵のお米やお金、またお酒を講に渡しておくので、それらをもとに1軒から1人ずつ出ている講の女性が買い物などをしてきて料理する。尾山では講も必ず精進料理を食べるが、元山では講は精進料理ではなくヒコデ、マルゴ、イワシ、ヤズなどの魚をサキナマス（刺身）で食べる。講の者の食事は昼食と夕食と二度食べる。講の者の飲み食いのための家を喪家とは別に1軒借りる。費用は喪主が出す。最近ではお金1万円と米3升と酒1升くらいである。その範囲内で食べる。余りを出してはいけない。女手は雇うと1日500円の決まりとされている。それは現在も同じだという。

葬式 葬式は原則として通夜の翌日の午後だが、最近では日を選ぶようになった。日時は門徒寺の住職と相談する。友引の日は避けるが、やむを得ない場合には、藁人形を作って棺に入れればそれが葬式に出席した人の身代わりになって死から免れるという。葬式を行なう喪主をショシモトと呼ぶ。葬式に呼ぶ親族の範囲としては、モージャ（死者）のキョウダイ（兄弟姉妹）、イトコ（従兄弟従姉妹）、甥、姪までを呼ぶ。出棺の際、デタチ（出立ち）の葬儀を営む。3カ寺の住職が縁側からカミノマ（上の間）に上がり経を読む。その後、別れの盃やデタチ（出立ち）の酒を交わす。

これは講が1升瓶の酒を黒塗りのオヤワン（親椀）に少しずつ注いで、親族がそれを回し飲みするというものである。そして、カミノマから縁側を出て出棺となる。3名の住職と棺担ぎをする講の男性4名も縁側から出る。服装は、モージャに近い親族の男性は黒の紋付きに袴、女性は黒の着物に縫い物の羽織を着る。遠い親族は黒の略礼装を着る。

野辺送り 10年程前（調査時の1995年からみて）までは、野辺送りといって歩いて棺をまず寺へ運んでいたが、天候に左右されるため、現在（1995年）では島の霊柩車を使用している。かつて、悪天候の時には棺を少しずらすだけでそれをウチソーレイ（内葬礼）といって間に合わせていた。野辺送りでの葬儀役割は、通夜の時に、親族の中で誰が持つのがふさわしいかを話し合っている。当日の朝、親族の者が各担当と担当者名前を呼ぶヨビダシ（呼び出し）をして葬列の位置につかせる。順番は、ツエヒキ（杖引）、生花や蓮の花、シカバナ、ローソク、カジメ、菓子、杉の森、ドジ、位牌、3カ寺の住職、棺担ぎ、棺付き、の順で葬列を組む。ツエヒキ（杖引）というのは遠い親族の男性2名が担ういわば寺への案内役である。竹の杖で上から約1m程のところまで白い半紙を巻き付け、竹の先端を2股に裂き、その竹の杖を持ち地面についてカチンカチンと音をさせながら先頭を歩く。シカバナは白い半紙で作った紙の花のことであり、男性の親族2名がそれぞれ持つ。カジメは海藻で作る飾りのことで、男性の親族2名がそれぞれ持つ。菓子は桐や下がり藤の形をした落雁で白木でできた三角のゴウという台に半紙を敷いて載せて置く。葬式では1対の白色の菓子だが、法事では2対の薄いピンク色や黄緑色の菓子をを用いる。男性の親族2名がそれぞれ持つ。杉の森というのは1本の棒に小麦粉と砂糖で作った4つの団子を刺したものを4本用意してそれをサンボウ（三方）と呼ぶ四角の台に挿した杉の葉の周りに挿して、4本の団子と杉の葉をこよりで結び付けたものである。男性の親族2名がそれぞれ持つ。この団子はモージャの長寿にあやかり、参列者に配られることもある。残った団子は焼いて処分する。遺影の写真は孫か跡取り息子のどちらかが持つ。位牌はアトトリ（跡取り）が持つ。ドジというのは焼香の盆のことで、位牌を持つ人の妻が持つ。葬列ではこの位牌持ちももちろんであるが、決して後を振り返ってはいけないという。振り返ると死者が後を引くからだという。棺担ぎは御輿を担ぐように肩に晒しを付けて棺を担ぐ役目で、オトコシ（男衆）と呼ばれる講の身体丈夫な男性4名が務める。その服装は作業着である。棺付きは棺を見守る役目で、モージャに近い男性の親族2名が務める。このようなシカバナ、カジメ、杉の森などの飾りはオトコシがコウヤド（講宿）と呼ばれる講の家の1軒を借りて、通夜までに準備しておいたもので、モージャの家の祭壇に飾られていた供え物である。それらを葬列とともに行列をなして寺へ運ぶのである。ドジ以外はほとんど男性が持つ。

土葬と火葬 土葬から火葬への変化を記憶している人は多いが、それがいつのことであったかについてははっきりせず、土葬は明治45年（1910）頃までだったという人もあり、昭和5年（1930）頃までという人もある。大正生まれの人にはかつて土葬をしていたことを確かに記憶している人が多い。自分の山や家の端にトメタ（埋めた）という。棺を土中に埋めてドロ（土）を盛り上げていた。目印にヨツイシ（4つ石）を置いて角柱の墓標の法名を書いて立てた。1年位たつころ中の棺が腐ってドスンとドロ（土）が落ちるもので年回忌のころにドロ（土）を盛りかえしてやった。火葬もその開始の年代がはっきりせず、大正5年（1916）頃からという人と、昭和20年（1945）頃からという人がいる。町営火葬場ができたのは昭和30年（1955）のことで、それまでは岩場で焼いていた

たという。葬儀場はいまは寺であるが、むかしは火葬場の手前の広場であった。昭和30年(1955)にできた町営火葬場を使用するようになる以前の火葬では、割り木を厚く敷き、油をかけたところに、藁や布を中にぎっしり詰めた棺を置いた。そして、その上にまた割り木を積んで藁をたくさん盛り下から点火する。むかしは部落の各戸が割り木を1把ずつ出して火葬していた。藁は喪家が出すが他の家が出してもよかった。火葬の総締めは講長で、このような火葬の段取りを整えるのは講の仕事であるが、実際に火を付けるのは必ず親族で、喪主のアトトリ(跡取り)が最初で、孫、アトトリの兄弟というようにモージャ(死者)に近い順番に火を付けていく。講の火葬の当番の者は、遺体が完全に焼けるまで待機しており、焼けたらそのことを親族に知らせる。現在(1995年)も町営火葬場で火を最初に付けるのは喪主に決まっている。次に喪主の子供、そして兄弟などが順々に付けていく。それが終わってバーナーの火をふかす。よく焼くと骨も少なくなりちょうどよいのだが、ハンド焼きといって骨をハンドに入れるの一杯になるくらい多く残るような焼き方はよくないという。

骨拾い 骨拾いのことを骨カミともいう。火葬した翌日の早朝6時頃に、近い親族が骨を拾いに行く。竹と木の一对の箸で骨を挟む。この時、箸は手渡ししないで、一度箸入れに箸を置いてから、次の人が取るようにする。お骨は骨ハンド(骨壺)に入れる。お骨を自宅に持ち帰ったら住職が正信偈しょうしんげという経を読む。そしてローソク、線香、オッパン(御飯)、遺影の写真などとともに、祭壇にお骨を四十九日の法事後の納骨まで置いておく。お布施は平成6年(1994)の例では、葬式の当日に3カ寺に各3万円ほど納めた。

お礼参り 葬式の翌日の昼に、お礼参りといって香典開きの作業を終えた親族の男性が3組に分かれ、シヨシモト(喪主)が門徒寺に、他の親族が手分けしてあとの2ヶ寺と八幡宮に、それぞれ永代神楽料を納めに行く。この時、3カ寺では精進料理を出す、八幡宮では魚などの生の料理を出す。この永代神楽料というのは戦後の昭和21、22年(1946、47)ころに八幡宮の収入がお寺と比べたら少ないということで、「生前にはお寺だけでなくお宮にも世話になった」ということから氏子が死んだ時に納めるようになったものだという。最近の勝安寺の門徒の例では、勝安寺に約25万円、他の2カ寺に各約10万円、八幡宮に約10万円の礼をしたという。また、徳蓮寺の門徒の或る人は徳蓮寺に18万円、他の2カ寺と八幡宮に各8万円ずつ礼をしたという。

初七日と四十九日 初七日はかつては葬式の一週間後に行なっていたが、現在(1995年)は葬式の翌日の夕方に行なう。門徒寺の住職が、シヨシモトの家に行き縁側からカミノマ(上の間)に上がり法要を営む。初七日の法要には、約1万円のお布施をする。そして、昼のお礼参りをしている間に、親族の女性が作っていた精進料理を親族で食べる。四十九日までは精進料理を食べ、漁を慎み、喪に服す。四十九日までは、まだ死者の靈魂が家の周りを浮遊しているから、屋根などの高いところに上がってはいけない、とか、四十九日を過ぎるまでは、死者の靈魂を招き戻してしまうため、餅をついてはいけない、などといわれる。

初盆 初盆の家では軒先や仏壇に大小さまざまな大きさの盆提灯を飾り、親族を招く。そして門徒寺の住職が来て経を読む。盆の行事は8月14日から8月16日に行なう。盆団子は作る家と作らない家がある。作る家では盆団子の他に親鸞上人の好物の餡を団子にからませる、またはおはぎを作る。仏壇にはソーメン、果物、蓮の花の形をした落雁を供える。盆に迎え火や送り火はない。

年忌 年忌は1周忌, 3年忌, 7年, 13年, 17年, 25年, 33年忌を経て最後の重要な年回供養が50年忌で, 盛大に催す。10年程前までは, 命日に精進料理を食べ, 翌日精進落としをするという2日がかりのものだったが, 現在(1995年)では精進料理は略して精進落としのみをしている。お祝いのようなものなので, 精進料理ではなく, 生魚などを食べる。なお, 33年忌, 50年忌になると, 門徒寺に約10万円のお布施をしなければならない。また, 3年忌以降は死者の衣替えのためといって年忌には木綿1反をお寺に納める。いまはお金で納めている。

事例Ⅲ 新潟県中魚沼郡津南町赤沢の事例

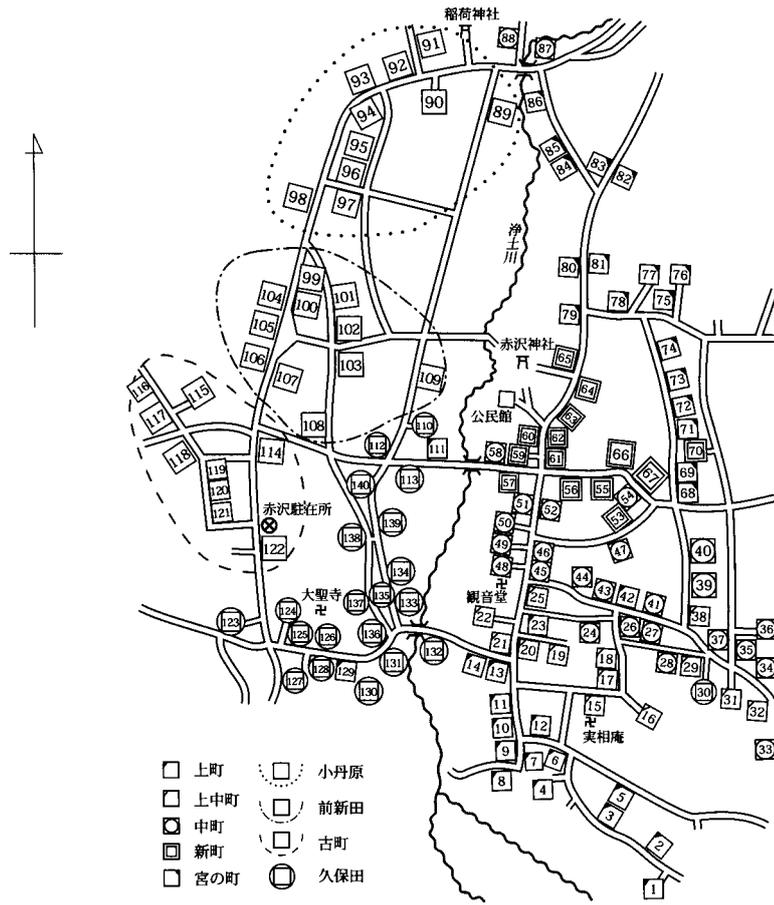
(1) 葬儀とヤゴモリ

これも1990年代の調査による情報である。赤沢は津南町の8つの面をなす巨大な河岸段丘のうちの上から2段目に成立した村落である。たいへんな豪雪地帯で積雪は少ない年で1m50cm, 多い年は6mもある。地元では赤沢のことを部落と呼ぶ。赤沢部落の中央には龍ヶ窪の池を水源とする浄土川が南から北へ流れており, 部落内には水路が張り巡らされかつて一度も水利争いはないと言われるほど水が豊富である。赤沢はその浄土川を境に東と西に大きく分かれる。現在(1994年)では東と西の区分はあまり使われないが, 昭和30年代までは部落の火葬場は東は東で1カ所, 西は西で1カ所があった。その東には上町, 上中町, 中町, 新町, 宮の前の5つのヤゴモリ, 西には小丹原, 前新田, 古町, 久保田の4つのヤゴモリ, つまり, 赤沢では合わせて9つのヤゴモリがある。ヤゴモリというのは新潟県の中魚沼郡から長野県の下高井郡へかけてみられる本家分家関係からなる同族集団のことをいう言葉であるが, この赤沢では部落内の地縁的な9つの村組のことを意味している。たとえば宮の前ヤゴモリの例でいえば, 現在(1994年)滝沢姓15戸, 草津姓2戸, 蔵品姓1戸からなっている。

表5 宮の前ヤゴモリ

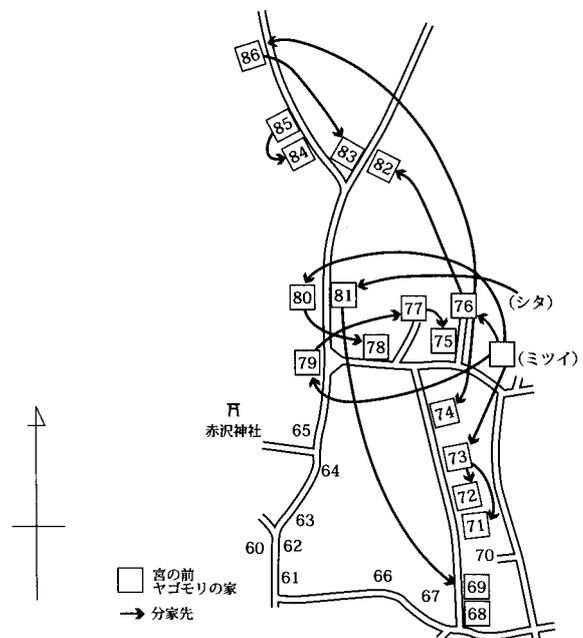
68 蔵品照夫(屋号なし)	71 滝沢兼太郎(カネタヤ)	72 滝沢幸重(ワカシン)
73 滝沢栄子(ヤマグチャ)	74 滝沢喜幸(ワカヤ)	75 滝沢良光(ダンゴヤ)
76 滝沢茂七(アタシヤ・チョウチンヤ)	77 滝沢勝実(ミセ)	78 滝沢富男(クニヨシヤ)
79 滝沢宏和(ワタヤ)	80 滝沢実(タザワヤ)	81 滝沢憲一(ボウシタ)
82 滝沢満春(ヤマガタヤ)	83 滝沢フサ(サカイヤ)	84 草津春一(アラヤノシンタク・ミユキ)
85 草津進(アラヤ)	86 滝沢陽一(サカモトヤ)	

この宮の前ヤゴモリは, ミツイという屋号の滝沢姓の大本家が昭和10年(1935)頃に新潟市内に転出し, その少し前にそのミツイの分家で当時6代目だったシタという屋号の滝沢姓の旧家も新潟市内に転出したが, その旧家のミツイとシタは現在(1994年)でも赤沢での冠婚葬祭などヤゴモリ内のつきあいは続けている。とくにミツイは大きな影響力をもっており, そのミツイの分家といわれる4戸とシタの分家1戸を中心にした本家分家関係がこの宮の前ヤゴモリの基盤となっている。そのミツイの古い分家が, 73 滝沢栄子家, 79 滝沢宏和家, 76 滝沢茂七家, 80 滝沢実家, シタの分家が81 滝沢憲一家である。76 滝沢茂七家は戸籍簿によれば, 「宝暦四年(中略)中魚沼郡赤沢村荒屋新田先代本家勘左衛門ノ男子宇平次ナリ, 滝沢宇平次本家三ツ井ヨリ分家ス」とあり, 宝暦4



赤沢の家配置図

地図 3



宮の前ヤゴモリ

地図 4

年（1754）の分家で現在11代目にあたる。この76滝沢茂七家の先祖の兄弟が分家した兄弟分家に当たるのが3代前に嘉重の弟が分家した86滝沢陽一家と82滝沢満春家、さらに滝沢陽一家の分家が83滝沢フサ家、2代前重次の弟が分家したのが74滝沢喜幸家である。

現在は地縁的な村組のようになっているヤゴモリであるが、もともとそれは本分家関係を中心とする血縁的な同族関係であったことを想定させる。分家は基本的に本家と同じヤゴモリに入るが、分家や転入戸がヤゴモリに加入する時には、ヤゴモリ内の本家をはじめ各家にあいさつをしたり、年に1度の農神祭の時に多めにお金を納めたり酒を振る舞ったりして承認を受ける。

なお、ヤゴモリには内ヤゴモリと外ヤゴモリとがある。この宮の前のヤゴモリの場合にはその18戸がすべてたがいに内ヤゴモリである。外ヤゴモリは赤沢部落内で親しいつきあいを続けている昔からの親戚のような家のことで、宮の前のヤゴモリ以外の家のことをさす。たとえば、76滝沢茂七家の場合には次の計9戸である。

表6 滝沢茂七家にとってのソトヤゴモリ

12	滝沢豊一（上町）
20	島田正夫（上中町）
25	島田重義（上中町）
28	石田シズエ（中町）
46	島田謙一（中町）
51	石田茂雄（中町）
61	大塚良平（新町）
	浅野ハル（現在は他出）
	滝沢垣治（現在は他出）

これらの家々は76滝沢茂七家の家長が毎年正月1日の朝にヤゴモリ以外の赤沢部落内で、年始のあいさつに行く範囲とほぼ一致しており、宮の前ヤゴモリ以外で古くからのつきあいのある家である。

(2) 旧家の葬儀記録

① 葬儀と香資と御斎

宮の前ヤゴモリの滝沢茂七家では古くからの葬儀記録や祝儀記録を作成保存しており、そこには宮の前の「内ヤゴモリ」、宮の前以外の赤沢部落の「外ヤゴモリ」、さらに「外親類」という3種類の交際範囲に分けて記録されている。もっとも古いものは文政7年（1834）の葬儀記録であるが、ここでは記録されている人物が特定できる近年のもので、以下のような茂七氏の先代の重次氏と先々代の嘉重氏の葬儀記録をみとめることにする。

<1>昭和16年（1941）8月19日「嘉斎良栄居士葬儀記録」（俗名 滝沢嘉重 79歳）

<2>昭和44年（1969）5月3日「大法篤間居士葬儀記録」（俗名 滝沢重次 83歳）

記録は、香資（ヤゴモリ・部落・外親類からの香典）、御斎使い（内ヤゴモリ・外ヤゴモリ・外親類の招待者）、献立とシュウカン（筍羹）と呼ばれるお返し、七日使い（内ヤゴモリ・外ヤゴモリ・外親類の招待者）、寺への御布施、葬儀における役割分担表、精進上げ（葬儀翌日の夕飯）、寺参り

(葬儀当日午後3時)、買い物の控え、一年忌・三年忌の出席者ともらい物など、一連の葬儀のプロセスにそいながら記録されている。

香資 葬儀の時に持参する香資をみると、現金だけでなく品物を持ち寄っていることが注目される。昭和44年(1969)の重次の葬儀では、ヤゴモリ(28軒)が、500円・1,000円・2,000円・3,000円の香典と、線香1束・ろうそく2丁・齋米2~3升・野菜・酒・もち米などの物品を持ち寄っている。ヤゴモリのうち、特に関係の深い、兄弟分家の場合をみると、重次の弟が分家した74滝沢喜幸家では香典2,000円、線香1束、ろうそく2丁、齋米3升、里芋1重、酒1升を出した。また重次の父の弟が分家した86滝沢陽一家は、香典2,000円、線香1束、ろうそく2丁、齋米3升、麩1袋、青菜、82滝沢満春家も香典、線香、ろうそく、齋米は86滝沢陽一家と同じで、他に里芋1重と醤油1升を出した。この兄弟分家3軒についてはだいたい同じ程度の香資を用意したといえる。滝沢陽一家の分家の滝沢フサ家は香典1,000円、線香1束、ろうそく2丁、齋米2升、甘かん1個、胡瓜1重、また74滝沢喜幸家の分家の94滝沢喜重家は香典1,000円、線香1束、ろうそく2丁、齋米2升、青菜、人参を出した。亡くなった重次の弟や叔父の立場に比べ、そのまた分家は香典の金額や香資の内容に差があることがわかる。

一方、昭和16年(1941)の記録ではほとんどの家がソバを用意し、他に白衣料10銭を持参する家も多かったが、昭和44年(1969)の段階ではソバも白衣料もなくなっている。たとえば屋号でシタといわれる大本家ミツイの旧い分家が昭和10年(1935)頃に赤沢から新潟市内に出たが、昭和44年の葬儀には香典2,000円を出している。物品はない。それ以前の昭和16年の葬儀には、まだ新潟市内に出て年数がたっていなかったためか、香典1円、線香1束、ろうそく2丁、齋米2升の他、車麩40個、昆布100匁、冷麦200匁と、白衣料10銭を出した。赤沢から他所に転出した場合には、香典だけで物品は省略する傾向があるといえる。このように、野菜などの物品を持参するのは内外のヤゴモリ関係者だけで、外親類は香典・線香・ろうそくだけをあげ、基本的に野菜などの物品は持参していないといえる。

御齋使い(葬儀当日の食事) オトキ(御齋)に来てもらったのは内ヤゴモリの21軒の61人(戸主21人)で、そのうち兄弟分家の75滝沢良光、77滝沢勝実、82滝沢満春、83滝沢フサ、86滝沢陽一の5戸は家族全員で来てくれた。外ヤゴモリは9軒22人(戸主9人)で、外親類は18軒33人(戸主21人)、そのうち2軒は家族全員で来てくれた。以上合計47軒116人(戸主51人)でオトキ(御齋)が行なわれた。これらの参加者をみると濃いつきあいの家では家族全員が呼ばれてきてくれており、その他の場合には基本的に1軒から1人ずつという例が多い。また内ヤゴモリは戸主が出席するが、外ヤゴモリや外親類では女性が出席する例が多いこともわかる。

七日使い(葬儀当日夕飯) 初七日が葬儀当日の夕飯とされてきている。それに招待されたのは内ヤゴモリ20戸の50人で、そのうち兄弟分家の84草津春一、87島田徳治、88島田陽、93滝沢寿三郎、94滝沢喜重の5戸は家族全員で来た。献立は冷麦と酒であった。外ヤゴモリは9軒13人、外親類は4軒5人で、合計68人であった。

精進上げ(葬儀翌日の夕飯) 精進上げが葬儀翌日とされてきている。それに招待されたのは内ヤゴモリ10軒25人で、外ヤゴモリが1軒だけで5人、外親類は5軒で7人、合計16軒37人であった。

葬儀当日の御齋と初七日、葬儀翌日の精進上げに招待されている人を見ると、徐々に少なく限定

されて行くことがわかる。1年忌や3年忌の法要になると、さらに限定され、内ヤゴモリでは兄弟分家の者だけになり、身内だけであるという傾向がうかがえる。

②葬儀の役割

昭和16年(1941)と昭和44年(1969)の、2つの葬儀の記録における役割の共通点と相違点とは、以下にみるとおりである。

表7 昭和16年(1941)と昭和44年(1969)の二つの葬儀

[昭和16年(1941)]	
亭主役	ミツイ(本家主人・新潟市)
葬儀係	ボウシタ(81 滝沢憲一家), ヤマガタヤ(82 滝沢満春家)
接待係	外親類
裁判役	ワカタ(79 滝沢宏和家), タザワヤ(84 滝沢 実家)
書記	サカイヤ(現在留守)
使方	ワカタ(79 滝沢宏和家)
料理方	セイマイジョ(51 石田茂雄家), フキヤ(現在留守)
穀係	サカモトヤ(86 滝沢陽一家)
筍羹兼餅係	カミ(25 島田重義家)
給仕	ヤマグチヤ(73 滝沢栄子家), ワカタ(滝沢宏和家), タザワヤ(滝沢 実家)
下足係	カネタヤ(71 滝沢兼太郎家)
山方	ヤマグチヤ(73 滝沢栄子家), ダンゴヤ(75 滝沢良光家), 嘉重(死者)の子分2人
納棺係	嘉重(死者)の弟など身についた親類4人
.....	
[昭和44年(1969)]	
亭主役	ミツイ(本家主人・新潟市)
書記	サカイヤ(現在留守)
使方	サカモトヤ(86 滝沢陽一家)
料理方	外親類
筍羹係	ワカヤ(74 滝沢喜幸家)
酒係	オヤケドン(61 大塚良平家)
配膳係	ミセ(77 滝沢勝実家), ワカタ(79 滝沢宏和家)
給仕	ヤマグチヤ(73 滝沢栄子家), 他女性3人
飯たき	インキョヤ(69 滝沢国敏家), ダンゴヤ(75 滝沢良光家), アラヤ(85 草津 進家)・女性
汁係	ボウシタ(81 滝沢憲一家), サカイヤ(83 滝沢フサ家)・女性
洗方	ワカシン(72 滝沢幸重家), ダンゴヤ(75 滝沢良光家), ミユキ(84 草津春一家), サカモトヤ(86 滝沢陽一家)・女性
茶番	サカイヤ(83 滝沢フサ家)・女性
下足係	ワカシン(72 滝沢幸重家)
納棺係	オヤケドン(61 大塚良平家), ワカヤ(74 滝沢喜幸家), 外親類2人
洗濯	2人(外親類)・女性
外手伝い	

なお、シュウカン(筍羹)といわれる葬式のお返しには、昭和44年(1969)には「白砂糖三キロ箱入り 女子供にはキャラメル一個ずつ」を配り、昭和16年(1941)には、「村内ノ者 饅頭八十銭分 村外ノ者茶器(一組四六銭)」を配っている。

以上の役割について少し説明しておく。書記は香代帳をつけ、オトキ(御齋)の人数を決めるこ

とがそのいちばんの仕事である。使方はオトキのフレなどを出し、料理方はオトキの料理を指示する。筍羹係は一番膳に昔は瀬戸物、今は砂糖をつけるので、その手配をする。酒係はオトキの時の酒のかんをする。配膳係はお膳の配膳を担当し、給仕、飯炊き、汁係、洗方、茶番、下足係などがオトキの作業分担である。そして、納棺係は禪^{ふんどし}一丁で湯棺と納棺をする。山方はハダカニンソク(裸人足)ともいい、穴掘りをする人である。しかし、これは戦後になってからは納棺係が兼務することになった。洗濯は死者の布団の皮を洗濯し、綿は家の北の方に干す。これは49日間藁縄で下げておく。接待係は僧侶や客へのあいさつをし、裁判役は「墓へ行ってくれ、こっちへ来てくれ、云々」と人びとを動かす人である。穀係は齋米や「七日のソバ」をあげる人、餅係は齋米の布袋に空袋でないようにお返しときまいの餅を入れて返す。仏壇に49個の餅を飾り、寺参りに持って行く。その49個の餅は四十九日が過ぎるまで1つずつ焼いて食べるといいとあって、葬式後親戚に分ける。

これらの係は細かく分かれており、しかもオトキの執行にあたっては、飯炊き、汁係、茶番などそれぞれの担当者が明記されている。葬儀では納棺や穴掘りなど直接死者の棺に触れる部分は死者の兄弟など血を分けた身内がし、その他の手伝いはヤゴモリが中心になっている。中でも亭主役は本家の主人が務める役として固定されていた。この亭主役はヤゴモリ内で特に付き合いが深い家に頼むため、家ごとにだいたい決まっている。例えばこの76 滝沢茂七家の亭主役は本家のミツイカ、嘉重の弟が分家したワカヤ(74 滝沢喜幸家)である。

この76 滝沢茂七家の葬儀記録から、内ヤゴモリは葬儀の香資に香典、線香、ろうそく、齋米のほか、季節の野菜や酒、醤油などの物品を持ち寄ることがわかる。しかも昭和16年には、七日ソバといって、ソバを必ず持って来ていた。このように物品を用意するのは外ヤゴモリや外親類では任意であるが、内ヤゴモリは必ず持ち寄っていた。そして、葬儀では穴掘りや納棺だけは必ず身内がしており、その他の葬儀の手伝いはヤゴモリが中心になっている。

(3) 葬儀

死の予兆 死の前触れとして次のようなことがいわれている。雨が突然ザーッと降り、体に震えが来ると親戚が亡くなる。カラスが鳴くと人が死ぬ。戸をたたく音がして「泊めてくれ」という声が聞こえたと思うと、その声の主が亡くなったことがある。遺体の枕元に供える枕団子が黒くならず、白いままだと一週間のうちに誰かが死んだり、隣の部落で死者が出たりする。死者と同年の者の場合、死を免れるために、お釜を被って自分で気持ちを込めるといことがかつてはあった。また、昭和4、5年(1929、30年)頃まではトシトリを行っていた。トシトリというのは死者の出た家が本家分家の同年代の人を招き酒や魚や正月に食べる物などを振舞うことをいう。

遺体 末期の水といって息を引き取る時に盃に水を入れ脱脂綿と箸を使って唇を湿らせる。ウチヤマガミ(短冊型の障子紙)を使用することもある。亡くなるとシモマクラ(下枕=北枕)に寝かせて布団や着物を上下逆さに掛ける。その上に魔除けのためといって刃物を置く。脇差、鎌、鋏など刃物なら何でもよい。遺体の枕元にはシクワ(紙花=紙で造った4本の花を輪切りにした大根や茄子に刺したもの)、枕飯(葬式の前に炊き茶碗に山盛りにして箸を挿し立てたもの)、ローソク、線香、枕団子(玄米を碾ひいて粉にしたものかまたは上新粉じょうしんこから4つの団子を作り皿に乗せる)を置く。枕飯と枕団子は埋葬もしくは納骨の際、一緒に墓へ持って行って置いておく。他に、茶碗など

に入れた水・ヒトイロバナ（一色花＝同じ種類の花のみのもの）を供えることもある。

通夜 お通夜には子供、孫、親族が交代で一晩中遺体の側につきそい、線香の火を絶やさないように番をする。来てくれた親戚に茶菓子、煮物などを振舞う。

湯灌 湯灌は行水ともいう。ハダカニンソク（裸人足）が裸になって腰に縄を巻き、部落所有の桶の中に水、続いてお湯の順番に入れ、その中に死者を入れて柄杓で水を掛け剃刀で頭を剃る真似をする。柄杓は使用後1ヵ月程使ってはいけない。現在ではアルコールで体を拭くだけになっている。

ハダカニンソク（裸人足） 死人を取り扱う者のことである。湯灌、納棺、センダグ（洗濯）、火葬または埋葬の作業を行なう。ハダカニンソクになるのは血縁関係のある身近な者で、子供・甥・姪とトリアゲッコ（取り上げ子）などである。ハダカニンソクはオトキ（お斎）の食物の準備に手を出すことができない。なお、子供や若い人が亡くなった場合のハダカニンソクは親・オジ・オバ・兄弟が務める。

死装束 死装束は、身内の女性が晒し布で袖とミゴロだけで襟のない白い着物を縫う。その際、糸は玉止めせず2人で同時に縫う。生前にこの着物をという指定があれば、それを着せる。

納棺 納棺はハダカニンソクが行なう。高さ約1m程の座棺に手を組ませ、数珠を掛けて納棺する。棺は死ぬとすぐに大工に頼んで造っていた。寝棺になったのは昭和36年（1961）に津南町の火葬場ができて火葬になってからである。副葬品としては、杖（死者が出向く長い旅路のために入れるもので棺の高さに合わせた小さなもので棺の隅に立て掛けておく）、六文銭（硬貨6枚を紙に包むなどして入れる。六地藏に渡すために持たせる欠かせないもので持たせておかないと死者からの知らせがあるという）、オケチミヤク（お血脈＝お守りのようなもので寺から貰う。また88才の祝いとして寺から贈られる。お釈迦様から代々の弟子の名前が記されており火葬の場合は戒名をいれて納骨の際一緒に納める）、草履、手甲、脚絆、数珠、その他死者が好きだったものなどを入れる。

葬儀と役割分担 葬式は本家のダンナが務めるテイシュヤク（亭主役）を中心としてヤゴモリの中で協力して行なう。死者の身内として、血の濃い親戚は葬式に来ることになっているが、遠くにいる親戚にはヤゴモリの人が知らせる。葬式における役割やその人数は厳密に決まっているわけではなく、その時々によって若干の違いがある。昭和40年代の例でみると次の通りである。

表8 昭和40年代の葬儀の役割分担

亭主役、書記	(葬儀録を記す筆の達者な者1人)
筍羹係	(引出物の係1人)
ツカイカタ	(使方＝一番膳から二番膳それ以降に移るとき隣家や近い家を借りて待っている人々を時間を計ってよびに行く役目)
酒係	(お斎の酒を注ぐ役目1人)
配膳係	(お斎の準備2人)
給仕	(女4人)
汁係	(女2人)
茶番	(女1人)
飯炊き	(男1人が女2人に指示して行なう)
洗方	(台所の片付けをする女4人)
下足番	(履物担当の男1人)
センダグ(洗濯)	(ハダカニンソクの女4人で死者の遺品の処理や洗濯を行なう。布団皮は剥いで洗い綿は49日間干しておく 着ていた物の洗濯もする)

納棺係	(ハダカニンソクの男4人で婚など死者と関係の深い人が行なう)
葬儀司会	
料理方	(男の人 味見や采配をふるう)
買物	(料理方の指示で買物などに動く)
ゼンコミ	(次の膳の組合わせをする)
棺担ぎ	(土葬のころかつてはあった)
山方	(屋外の式場の準備をする。かつてはあった)

出棺と野送り 棺の置いてあった所は塩を撒いて清め、そこから玄関までずっと箒で掃いていく。棺は必ず玄関から出す。野送りの葬列は津南町町営の火葬場を使うようになるまで行なっていた。ヨセと呼ぶドラを鳴らして葬列が出ることを知らせ、近所の人が見送る中を野送りに出る。この時、見送りに来た子供たちにお菓子を配る習慣があった。葬列は墓地の隅の一角にある埋葬場と呼ばれるヤマの式場まで行くのだが、その通る道に手伝いの人が、あらかじめ六地藏の札が付いた棒を適当な場所六ヶ所に立てておく。それを葬列の最後についた者が抜きながら行くことになっていた。

葬列 葬列の構成、順序はかつてはだいたい次の通りであった。

- 1 五色の旗 [五寸真四角の緑黄赤白紫の各色の千代紙をつなげたものが竹竿の先端についている] (ヤゴモリの子供が持つ)
- 2 アカシ [灯=紙を張った四角の箱にローソクが入っている 昼の明るい時刻でも使う]
- 3 雄のタツガシラ [竜頭=ジャガシラ (蛇頭) ともいう。部落所有で十王堂に保管されている。木製の口を開けた竜の頭で棒が付いている] (手伝いに来たヤゴモリの人や親戚の者が持つ。男なら誰が持ってもよい)
- 4 お膳 [霊供の飯、味噌1皿、塩1皿、位牌、死者の枕元に供えてあった紙花、枕団子などを乗せてある] (ツギコ (跡取り) が持つ)
- 5 菩提寺の僧侶
- 6 棺 [4本の柄のついたクンプタ (棺蓋=棺を載せる輿の一種で上に鳥の鳳凰が付いている 部落所有で十王堂に保管していた) に座棺を載せて覆い4人で担ぐ] (担ぐ人はヤゴモリの人、ハダカニンソク、親戚など様々だが、男性のみである。8人で交代しつつ運ぶこともある)
- 7 家族と親族
- 8 クンプタに似た傘 [クンプタの半分程の大きさで五色の紙が貼ってあり棒が付いている]
- 9 雌のタツガシラ [口を閉じたタツガシラ]
- 10 アカシ—六地藏の札を抜いていく者

ヤマの式場 墓地の側あるいは墓地の一角にある二間四方の広場である。町営火葬場ができる以前まで使用されていた。埋葬場と呼ばれるが、そこに埋葬するわけではなく、埋葬前の式を執り行う場所である。手伝いの人が事前に式場の準備をしておく。草を刈り、式場を取り囲むように縄を張る。一辺には幕を張り中心にある石の台の隣に杭を4本立てて棺を置く台とする。これが準備である。葬列は張ってある縄を切って式場に入り、台の廻りを6回まわってから棺を置く。石の台の上に位牌、枕飯、枕団子、線香、紙花などお供え物を置き、僧侶が引導を渡し焼香をする。

土葬から火葬へ 昭和36年(1961)に津南町町営の火葬場ができてから火葬になったが、それまでは火葬と土葬の両方が行なわれていた。昭和15年(1940)頃には土葬と火葬が半々であったと

いう人もある。戦後に火葬が主流になったという人も多いが、戦後でも土葬は実際に行なわれていた。昭和36年(1961)の滝沢イトエさんの義父の葬式、昭和37年(1962)の滝沢勝実さんの祖母の葬式などが土葬であった。ヤゴモリによって葬法が決まっているわけではなく家によって違っており、本人の遺言による場合もある。滝沢三直さんの家では、滝沢善治さん(明治30年(1897)生)の記憶の限りではずっと火葬だったという。ただし、小さな子供の場合はほとんどが土葬で、町営の火葬場が設立されてからも土葬にしていた。例えば滝沢茂七さんの孫(昭和40年(1965)死亡)、高橋キイさんの次男(昭和49年(1974)に2歳で死亡)などの例が知られている。また、冬は豪雪で焼くのが困難なため土葬だったという。

火葬 昭和36年(1961)の町営火葬場の設立以前に使用されていた火葬場は稲荷神社の近くと新町の墓地の近く、そして部落の東と西の外れに一カ所ずつあった。赤沢の東側の人は東の火葬場を使い、西側の人は西の火葬場を使った。火葬場は石が敷き詰められており、その上で焼いた。埋葬場での式の後、火葬場へ行き、ハダカニンソクが焼く。焼き方については次のような説明が聞かれた。関谷孫一さんによれば、藁で編んだ筒状の籠(直径80cm・高さ1m程)の中に薪、その上に反り返らないように前屈みにして手を頭の後に組ませた遺体を北向きに座らせる。濡れた筵を掛け、石油を少しまき、籠の南側の穴から火を付ける。滝沢善治さんによれば、火葬場にある切り石の上に薪を、その上に藁を円形に重ね、裸にした遺体をその上に乗せ、藁と筵を掛けて腹から火を付ける。島田一夫さんによれば、藁で作ったツグラの中に棺を置き、棺の下に薪、上には筵を据えて焼く。灰になるまで、家と火葬場を行ったり来たりしながら面倒を見る。遺体を焼いたら翌日、ハダカニンソクと身内がお骨を拾い、仏壇へ納める。線香とローソクをあげ続け、一週間後に石塔の下に納める。冬は雪があるので春の彼岸まで待つ。この時、枕飯、線香、シクワ(紙花)も一緒に墓へ持っていき置いてくる。この日の晩に念仏講(身内の者が大きな数珠を回しながらお経をあげる)をしたこともある。

土葬 埋葬場での式が終わるとすぐに墓地で埋葬する。およそ直径3m、深さ2~2.5mの穴に埋める。穴は死亡後すぐに掘っておくが、穴掘りをするのはハダカニンソクの場合と親戚とヤゴモリの近所の人である場合などさまざまである。ヤゴモリ内で穴掘り係の当番順が決められることはない。とにかく親族を中心に掘ることのできる若く力のある者が事にあたるといふ。通常4~5人だが、雪が積もっている時期は穴を掘る前に穴までの道の雪掻きも加わる非常に大変な作業であるため10人程度で行なう。埋葬作業はハダカニンソクが行ない、身内が立ち合う。埋葬した後、ハダカニンソクが盛ってある土の上に棒を約1.8mの高さに3本組み、タイマツ(松明)を括り付けて燃やす。3本組むのではなく、盛り土に1本の棒を突き立てる形式のものもある。タイマツ(松明)は40センチ程のヨシ(葦)を直径10センチ程の太さに束ねたものである。その後一週間、毎晩身内が墓に行って松明を燃やす。山犬が掘るのを防ぐためとか魔除けのためなどという。松明の代わりに提灯を灯すという場合もある。

オトキ(御斎) 野送りから帰ると身内、親戚、ヤゴモリの人たちが家に集まり、オトキ(御斎)を食べる。オトキは酒、飯、汁などで魚肉は使わない。ヤゴモリの手伝いの人がオトキの準備をする。人が家に入りきらない場合は、1番膳、2番膳と数回に分けて行なう。

特別な場合の葬法 積雪がある時や天候が悪い時など墓地に行くのが大変な時には、ウチインド

ウ（内引導）といって野送りをせずに家で引導渡しをした。葬列はなく埋葬のみとなった。また、子供が死んだ場合は、人を多くは招かず、その子供の友達を招いて葬式を行なう。クワンブタ（棺蓋）は使わずに棺のまま担ぎ、大人と同じ墓地に土葬する。全体的に小さな規模の葬式である。死産の場合も必ず土葬で、お寺は呼ばない。妊婦の場合は、ふつうの死者と何ら変わることはなく、腹から赤子を取り出すこともない。ただ、ナガレカンジョウ（流れ灌頂）といって特別な供養をした。川の側に4本の棒を立ててお経を書いた布を張り、通行人に柄杓で水をかけて供養してもらった。布が腐って流れるまで続ける。現在では行なわれていない。

ナノカテンとタナオクリ 葬儀から7日目に手伝いの慰労としてヤゴモリの人を呼び、蕎麦を振舞うのがナノカテンである。現在は葬儀の当日に行なう。また、葬儀から7日目に葬式の祭壇を壊し近しい人や親戚が墓参りをしてお経をあげるのがタナオクリである。

ショウジンアゲ（精進上げ） 死後35日経ってからナマモノを食べることが許される。ハダカニンソク、身内、近所の人を呼び、形見分けをして、魚肉を食べる。それまでは煮干しでさえも使ってはいけぬ。現在は葬儀の当日に行なうようになっている。

シジュウクイン 四十九日たつと死者の魂が屋根から離れるといい、身内、親戚でお経をあげて、四十九餅を食べる。四十九餅は平たい餅を三段重ねにしたもので、葬式の前の晩に搗いて箱に入れて祭壇の下に置いておく。かつては死者がでた家の者は、1週間は仕事をしてはならなかった。また、汚れた身体で神様の前にでるとバチがあたるといふことで、49日が過ぎるまでは神社にお参りしてはいけぬ。その他、枕飯を炊いた道具は1週間使えないとされていた。

四十九日以後の供養 百か日と年忌供養がある。行なうことは同じで、お寺を呼び、お経をあげてもらおうといったものである。年忌供養にはイッセキ（一周忌）、3年忌、7年、13年、17年、23年、25年、33年とあり、33回忌でトオリオサメとし、仏の供養がすべて終わることになる。

位牌 ヤマ用と仏壇用と2つ作る。ヤマ用とは葬式の時に使い、墓に置いてくるもの。位牌の作り替えは家や経済状態によって異なる。作り替えは一年忌または三年忌のときに、桐の白いものから黒塗りのものに作り替える。桐のものは作り替えの時に墓の前で燃やす。それとは別に寺位牌を新しく作り、年忌の時に供養してもらう。

共同墓地 共同墓地は宮の前、新町、向峰、上城の四ヶ所にあるが、それらは明治になってからできたものである。それまでは各家の敷地内にそれぞれの家の墓地があった。どの家の墓がどの共同墓地に属するかは区毎にまとまっている。ただ14区は2ヶ所に分かれている。宮の前の共同墓地は16区（宮の前）の家に限られており、この土地は滝沢のダンナ（大本家のミツイ）が16区のために土地を寄付したものである。

寺にある墓 曹洞宗実相庵には寺の先住の住職の墓と東京に出た檀家（根津正行）の墓があるだけである。浄土真宗大聖寺にも寺の先住の住職の墓と滝沢喜多栄家、涌井好文家の墓があるだけである。

葬儀の変化 かつて行なわれていた葬儀と現在行なわれている葬儀とでは大きな違いが生じている。たとえば、平成7年（1995）2月の葬儀（久保田のヤゴモリの関谷政一家）では、4日に死亡して5日の昼に町営火葬場で焼いた。6日午前10時から自宅で葬式を行ない、昼12時に大割野の料理屋でオトキ（御齋）をした。ヤゴモリの1軒につき1人が呼ばれた。夜には手伝いの慰労の意

味でショウジンアゲとナノカテンを行なった。その6日夜の食事は5日と6日の朝から公民館で親戚とヤゴモリの近所の人とが用意した。みんな女性で、来た人で協力しあって行なう。手伝いに来たのは親戚とヤゴモリの関谷孫一家の幸江さん、関谷茂太家のキクさんと順子さん、関谷豊作家のテルさんと郁子さん、関谷俊次家の栄子さん、関谷茂家のチヨさん、関谷忠平家のシズさん、関谷昭男家のミヨシさんであった。これらの家は同じヤゴモリであり親戚関係にある家である。食事の内容は次の通りであった。

表9 平成7年(1995)2月6日夜の料理

ザッコクピラ (雑穀平)	[お椀に盛られた汁物。油炒めにしてから醤油味の汁物にする。蕎麦、昆布、牛蒡、竹輪、焼き豆腐、里芋、人参、蒟蒻、薩摩揚げなどが入っている]
ソバ	[一口大にまとめたものをお椀に3つずつ盛る]
折り詰め	[仕出しをとる]
酒の肴	[大きい皿にまとめて盛る。木耳の辛子あえ、漬物、煮物、薇の油炒めなど]

これは従来の葬儀と比べるとかなり簡略化されているかたちである。オトキ(御斎)は自宅で行なわずお店ですませるように変わっている、ナノカテンの料理にも仕出しを取るなどの変化がみられる。時間的にも短縮されており、7日目に行なわれていたナノカテン、35日目に行なわれていたショウジンアゲも、ひとつにまとめて葬式の日に終わらせてしまっている。葬法の変化、とくに葬儀の前に先に火葬してお骨にしているのは大きな変化である。野送りの葬列がなくなったこと、墓の側の埋葬場での式がなくなったことも大きな変化である。穴掘りの手間のかかる埋葬や人手で焼く火葬は非常に手のかかるものであったが、町営の火葬場を使うことでその作業がなくなり負担が減った。

事例Ⅳ 岩手県下閉伊郡岩泉町岩泉

(1) 葬式の準備

これも1990年代の調査による情報である。岩泉の字中家の坂本シゲさんを中心に男女数人の皆さんにいろいろと体験にもとづく貴重な話をしていただいた。

知らせ 家族が死亡するとすぐに向こう3軒両隣へ知らせる。その他、死亡を関係者に知らせる役はホトケ(仏=死者)の身内の者か、身内に準じるナゴ(名子・納子)の者で男性に決まっている。1人が身内で1人がナゴという例も多い。喪家では、両親の実家、主人の実家、嫁の実家、兄弟姉妹、つきあいの深かった友人などに知らせる。知らせに行くと、その家の入り口が2つあれば北側の入口から入るのがふつうで、玄関からよりもふだん出入りしているその北側の裏口、勝手口から入る。知らせを受けた家ではホトケ(仏=死者)の兄弟姉妹は早速身づくろいをして喪家へ顔を出す。まずホトケ(仏=死者)を拜んでから葬式の手伝いにとりかかる。かつてふつうに家で死んだ場合はよかったが、病院など家の外で亡くなった場合にはホトケ(仏=死者)は玄関から家の中に入れなかった。

葬具と準備 葬儀一切は親族が中心になって行なう。親族を中心に向こう3軒両隣りの者が手伝

う。ホトケ（仏＝死者）の兄弟姉妹が中心だが、そのつれあいや親子は手伝いには来ない。とくに人手がなくて頼む場合はある。彼らも葬式には来て香典を出し野辺送りには参加する。カマドが大きければ参加する親族の数も多い。

男性たちの仕事は、木造りと呼ばれる一連の木工細工で、棺、仏こっぱと呼ぶ位牌、一杯飯の篋（しゃもじ）、そして、ノバナ（野花）、シカ（死花・四花）、ハタ（幡）、香炉、茶水を載せる盆、七本仏の塔婆などを作る。棺はふつう松の板で作る。よほどの家でないと檜は使わない。一時桐の木を使ったが桐は軽くてよい。が、土へもどすにはやはり松や杉がよいということで松の木がよく使われた。仏こっぱと呼ぶ位牌も作る。仏こっぱは寺へもっていってお布施を納めて戒名を書いてもらう。木の鋏も作る。タイマツ（松明）といって木の棒に真綿に赤いインクで染めたものを付けたものを作る。一杯飯の篋（しゃもじ）も作る。これは一杯飯を盛るのに1回使ったら割って捨てる。ノバナ（野花）はアオキという木に色とりどりの紙をつけて花にする。奇数本用意する。シカ（死花・四花）はシカバナともいい1対作る。子供の死者は赤い紙と白い紙で、大人の死者は金色と銀色の和紙で作る。ハタ（幡）は2本1対で作る。縦長の長方形の幡で幟の形をしたもので六尺の竹の先に紐がついており、幡の下の両方の端には猿の形をしたものを付ける。赤い頭に紫の体の猿の縫い物で、むかしの人の話では残された家族の幸せを願って全部もって家を去るという意味があるという。申の日には今でも結婚式はしない。このハタ（幡）は葬列で必ず身内の女性がつもつことになっている。コマゴ（子孫）の女の子か、いなければその他の身内の女の子がつもつ。

女性と勝手役 葬式の仕事をする女性は身内の女性が中心で、向こう3軒両隣りの家の女性が手伝う。主催者は喪家の主婦である。女性の仕事は勝手役つまり台所役が中心で、死者に着せる白装束を縫う仕事も女性たちの仕事である。白装束は旅路の着物でみんなで縫う。白い晒しの布で着物を、紫の木綿の布で羽織りを縫う。麻や絹は避けた。台所の仕事では、「葬式まんまは小豆まんま」とか「粥の汁」などという。葬式には小豆飯を作って食べるが赤飯とか赤い御飯とは言わない。セキとかアカの語は避ける。粥は野菜を何でもあるだけ入れるが7種類、9種類などと必ず奇数にする。そして、小さく短冊切りにする。大根やごぼうや人参など四角のものを四つ切りにすると末広がりになるのでそれを避ける。本家分家関係の親族のことをこの地域ではカマドといい、そのカマドが大きければ参加する親族の人数も多く、食膳の用意の上でその人数を見抜く必要がある。身内の女性の中の主婦であるお勝手の総支配人にとってそれが大変な仕事である。そして、それこそが腕の見せ所でもある。「死人の一口ぐい」といって、葬式のときはみんな白い飯が食えるといい1回の葬式で何百食分もの米がなくなったものだという。

葬式まんじゅう 死人が出ると必ず葬式まんじゅうを作る。お勝手ですぐに作る。数は奇数である。彼岸団子と同じようなものだが、小麦粉を蒸して作り中に小豆の餡を入れる。昭和初年頃までは小豆のかわりにじゃがいもの餡を入れていた。

一杯飯 一杯飯は身内の女性が炊いて作る。サンボンアシ（三本足）と呼ぶ五徳を使い家の軒先から少し外側の場所で炊く。このとき鍋には蓋をしないで炊く。沸き立ってきたら差し水をするが、ふだんは差し水は必要ない。一粒残さず茶碗に盛る。このとき使ったサンボンアシ（三本足）と鍋は縁の下に隠しておいて一週間は使わない。一杯飯は死者が使っていた茶碗に御飯を盛る。まわりに白い半紙を三角に折ってめぐらす。その半紙には墨で左手で左向きにカタ仮名のシの字を書く。

(2) 葬式

遺体 死者はザシキ（座敷）などの家の中でも広い部屋、客間などに布団を敷いて寝かせておく。枕元には一杯飯、一本ローソク、線香などがあげられる。布団の上には魔除けの刀か鉞や鎌などの刃物をおく。逆さ屏風が巡らされる。そして、身体が堅くなる前に湯灌の湯を使わせる。それまでホトケが着ていた着物はシニカワ（死に皮）といって焼いて捨てる。ホトケサマ（仏様＝死者）が生のうちにはローソク1本、線香1本を枕元に供える。

湯灌と死装束 息を引き取ると死に水といって親兄弟が真綿か脱脂綿を割箸に挟んで水を飲ませた。井戸から汲んできた新しい水を飲ませた。そして全裸にして湯を使させた。早水、逆さ水といって水に湯を加えて湯加減をしたもので、ふだんは湯に水を加えるが、死者に湯を使わせる時は逆さ水にする。湯灌は死者の子供など最も血の濃い者がする。頭から順番に下の方へと洗っていき拭いてから死装束をさせる。両手を合わせて数珠をかける。数珠はすぐ腐るように杉や松で作ったものを使う。夫が死ねば妻が、妻が死ねば夫が中心になってコマゴ（子孫）がこの湯灌をし死装束を着せる。死者の額には三角の白い半紙を紐に巻いてつける。額にこの白い三角の紙をつけるのはホトケだけで喪主はつけない。

納棺 納棺も身内の最も血の濃い者が3人か5人の奇数です。ホトケ（仏＝死者）に唾など汚れものが落ちてはいけなと納棺に当たるものは口に半紙をくわえる。荒縄を帯に巻いて無言です。棺の中には白い紙の袋にかんなくずやおがくずなど腐るものを詰める。納棺に当たった者が着ていた着物は一週間はしまっておきその後洗い濯ぎをする。棺の蓋の釘は親戚の遠い人から順番に金槌で打つ。最後に顔の近くは夫か妻が打つ。1本の釘は3回で打つ。身内が多いときは1人で1回ずつ3人で打つ。その金槌は一週間は使わない。納棺、入棺してからお通夜で、生のホトケのままではお通夜はしない。

なお、子供の死者の場合も白装束で納棺する。棺は坐棺で紐を交錯させて大人1人で背負うが、必ず死者ががぶさるような向きではなく、死者の背中が背負う者の背中に当たる向きにして背負う。大人の場合、その死者が養子にきた人でその実家の方角に向けて埋めるよう遺言することがあればそのようにした。とくになければ辰巳といって東南の方角へ向けて埋めることが多かった。

棺への設え 葬式まんじゅうと団子を13、17、23個などと奇数個、むかしは丸く積み重ねていたがいまは三角に積みあげている。それを1対作り、棺を安置した所の両脇に飾る。位牌、一杯飯、ノバナ（野花）、シカバナ、木の鋏、タイマツ（松明）などを飾る。納棺すると、ホトケ（仏＝死者）へのはじめてのお膳をあげる。そのお膳は、御飯、豆腐汁、こんにゃくと油揚げのいりもの（煮付けたもの）、くるみでのあえもの、酢の物からなっている。これを葬式膳といい、同じものを参加者みんなも食べる。ただ、ホトケ（仏＝死者）の膳だけは左膳といって御飯を右にお汁を左にしておく。

葬式 葬式は、太陽をさけて夜明け方とか夕食後の陽の当たらぬ時間帯に行なった。昭和18～20年（1943～45）頃まではそのようにした。朝、小豆まんまのお膳に粥の汁におかずで食事をす。おかずは何でもよい。ただ生ま物はいけな。葬式の朝、家ではザシキ（座敷）に棺が安置されて一杯飯、ローソク、線香、ノバナ、シカバナ、死に水といって唇を濡らしたときの茶碗と水さし、お膳のミニチュア、七本仏、塔婆3枚、その他の装具類が並べてある。この葬式のときホトケに食事のお膳をつける。このお膳は誰も食べない。葬式が終わったあと下げてまとめてどこか適当

な所へおいておく。夏は腐るのが早いので畑の隅などへ埋める。住職の読経などがすむと家族と親族が順に焼香をする。そして参加者も焼香をする。住職はそれで帰る。

野辺送り 棺を担ぐのは、血の濃い親族でコマゴ（子孫）である。それが少ないときには名子か下男が担ぐ。玄関からではなく縁側から担ぎ出す。家から寺まで行列を組んで行く。葬列の順序とそれぞれをもつ役は次の通りである。なお、これらのうち位牌をもつ者、遺影の写真をもつ者、棺を担ぐ者はみんな着物の襟に約5センチくらいの紫か黒の布切れを掛ける。襟の後ろのちょうど背中の上あたるところに一部を襟の中に入れて残りが後ろに垂れ下がるように掛ける。これは埋葬のときに一緒に墓穴に入れる。

これらの役割は、家族や親族がいればそれに越したことはないといい、家族や親族が中心となっている。ここでは、花籠、善の綱はない。また、火葬になって野花の前に蓮華の金銀の造花1対2組がつくようになった。しかし、最近自動車の普及からこの行列を省略して寺の山門前で行列を組んで3回まわるのみとしたりそれさえも省略する例も見られるようになってきている。葬列が寺へ着き山門を入ると庭で時計と同じに3回まわる。その後、本堂に아가って正面の本尊が住職や参列者の後背にくるように棺を正面出口の側に据える。住職を中心に背中に本尊、前方に棺、住職の右側に葬列で役に着いた人たち、左側に一般の参列者が並び、住職がお経を唱え引導を渡す。土葬の時は木の鋏を、火葬の時はタイマツをもって住職が棺を上からドンと一つき叩くような所作をする。そして、おはらいをして焼香をする。

表 10 葬列の例（話者たちの記憶による）

1	灯笼（名子・使用人・隣近所・友人など）
2	縄（ホトケがオヤジの時は本家の主人、アカチャンの時は実家の主人・本家なら近い分家の主人）
3	籠（名子・使用人・隣近所・友人など）
4	花〔造花、一対ずつで5組とか7組、寺から借りてくる〕（隣近所・友人）
5	シカ（孫）—盛り物〔松をかたどり朝日をかたどり団子を3本の串にさしたもの〕（一番世話になっている人・近い親戚）
6	線香（友人か隣近所）
7	ハタ（コマゴの娘で若い女の子）
8	七本仏（一番近い分家）
9	塔婆3枚（兄弟姉妹で一人1枚ずつ）
10	木の鋏（外孫）
11	タイマツ（内孫）
12	茶水（ホトケの看護をした身内、兄弟姉妹）
13	香炉（孫）
14	遺影の写真（ホトケが主人の時は三男か四男、いなければ娘婿）
15	位牌（跡取りで長男）
16	棺（コマゴ、コマゴの従兄弟、名子、寺まで遠く重いので替わりの者も用意）
17	色被り〔白い晒し布を頭に被ったり片襷に掛けたりしたお供の女性〕（友人の妻・友人など）
18	撒き団子〔団子をつぶしたものに生の米をまぶして箆に入れて途中の辻や寺の山門などで撒く。そのとき南無阿弥陀仏と唱える〕（女中・下男・使用人。念仏を唱えながら撒くので声のよいそれに向いた人を頼むこともある。年寄りでもホトケとつきあいのあった人も）
19	一般の参列者
20	後灯笼〔むかしあったがのちには省略〕（名子・使用人・隣近所・友人など）

表11 葬儀役割の例(話者の提供による記録、()内の続柄は話者によるメモ)

「昭和貳拾壹年拾月三十一日前十時 葬儀式次第 大通 横屋」		(表書き)
「為廣徳院祥山賢道禅居士位 昭和貳拾壹年拾月貳十四日午后四時亡 俗名 工藤完治 享年五十七才」		(裏書き)
1	火縄 中町 (本家)	
2	先灯籠 遠藤伊助 (納子)	
3	伍龍 工藤仁太郎 佐藤市太郎 佐藤福太郎 佐藤政吉 (納子)	
4	野花 佐藤作次 樋合 玉文 (親戚)	
5	線香 遊野教道 高藤 玉津復之助 (親戚)	
6	寄贈 花輪一对 株式会社 鹿嶋組 寄贈 花輪一对 土建会社 寄贈 花輪一对 南定 寄贈 花輪一对 南伊	
7	盛物 丸隆 橋場 (親戚)	
8	蓮華 藤田勝二郎 佐和屋 (友人) 工藤重三郎 (いとこ) 川村恒二郎 (甥)	
9	塔婆 高橋完治郎 (兄) 南澤完七 (親戚) 玉澤安太郎 (甥)	
10	七本佛 高橋新平 (実家)	
11	旗 コト子 ヨシ子 (姪)	
12	死花 丸屋ナヲ 木村屋政美 南澤 毅 佐々木保子 (親戚の子)	
13	祠堂物 啓二郎 (甥)	
14	鍬 リカ (娘)	
15	茶水 トシ子 (娘・長男の妻)	
16	香炉 カノ (娘)	
17	枕飯 良治 (二男)	
18	位牌 健 (長男)	
19	写真 八重樫礪次 (甥)	
20	霊柩 後藤長兵衛 加藤富夫 佐々木与三郎 八重樫信也 (納子)	
21	天蓋 佐々木太助 (納子)	
22	棺側 八重樫礪次 (甥) ママ 木村治三郎 工藤宗七 工藤祐太郎 (親戚)	
23	後燈籠 工藤伊之助 (納子)	
24	墓標 工藤藤太郎 (納子)	
25	色被 上宿 丸屋 小中屋 樋合 樋合カマド 枡や 亀屋 かじや 工重 木村屋 医院 中松屋 小松屋 局長 早鈴 中村屋 佐和屋 橋場 丸石 藤勝 (以上 親戚)	
26	入棺者 工藤信夫 コト 不二 (親戚)	
27	御野礼 南伊 高橋完治郎 中町 (親戚)	
28	留守居 川村こと 玉澤ふじ 八重樫ひで (妻の妹) 工藤市郎 工藤儀三郎 南澤平次郎 (親戚)	

土葬 こうして式が終わると墓地まで棺を運ぶ。喪主から始めて家族も親戚もみんな1握りずつ土を墓穴にかける。後は掘ってくれた者たちが埋める。土を盛り上げただけにしておく。その時、棺を埋めたので土が盛り上がるはずなのに時には土が少なく盛り上がらないこともありそのようなときには、「この強欲たれが」と言ったものだという。欲張りで死んでも土まで持って行くと冗談を言って笑ったという。土葬の頃は、身内と名子の土葬の役の者たちが5人とか7人というふうに奇数の人数で喪主とともにお墓に行き、まずヤシキトリとかイチブトリといって埋葬する場所を決める。喪主がここをお願いしますと決めて決める。土葬の役はあくまでも血の通った者で親戚の若い男性が中心となり名子が一緒に手伝う。

穴掘りの人たちが土を被せてくれた後で、身内と住職とでおさめのお経を唱える。身内が土を盛りなおし茶水、香炉、一杯飯、ローソク、線香をあげ、お膳に半紙に洗い米、団子、水、花をあげる。少しずつ住職がまず洗い米と団子と水をあげ、次に喪主があげ次々に身内があげる。この洗い米と団子はお重に入れて持参する。そのお重は米を少し残しておいて洗わずに一週間ほど朝夕、洗い米と団子を墓に追加していく。米を少し残しておくこと寺参りのお重だとわかるという。これら墓地の供え物はカラスやすずめが食べてくれればよい。食べずに残るようだと縁起がよくない。残った時には初七日の夜に片付けてくるが、そんな時には新しい仏が出るかもしれないと心配した。カラスは線香のおいがするので食べないのだともいう。また、位牌をもつ役と棺を担ぐ役の者は葬列ではわらじを履く。そのわらじは結んでかつて寺にあったガンコドウグ（龕小道具）と呼んでいた葬送の諸道具を納めていた小屋に吊しておいた。川で鮎などの漁をする人たちがそれをとってきて履くと漁があるといたりした。埋葬した上には七本仏と呼ぶ塔婆3本を立てておくがそれを欠いて持っているとならぬと魔除けになるとか勉強がよくなるよくなるよといったりもした。なお、木の墓標は盛土の真ん中ではなく棺の後ろあたりに立てる。

火葬 戦前までは土葬だった。戦後、火葬になった。火葬が義務づけられた。戦前までは伝染病の場合だけ火葬していた。戦後の火葬は露天で焼いた。棺薪を積んで濡れた筵を掛けて日暮れに火を付けて一晩かけて身内や名子が酒を飲みながら焼いた。棺に火がまわると死体が手足を延ばして外へ出てくることもあった。名子がいない場合にはお金を出して火葬の手伝いの人を雇った。この火葬の役は身内やそれに準じる名子で隣近所の家ではなかった。戦後、最初の火葬は昭和22年(1947)の三国信子さんの母親のときだったという。

墓地 墓地は寺にある。岩泉の寺は曹洞宗洞沢山雲岩寺でほとんどの家はその檀家である。その寺の墓地の使用権を買うかたちで毎年宗旨金の名目で2,000円納めている。寺へ納めるものとしては、3月と9月の彼岸に団子を7個納めた。その団子の中には小豆の入っているものだった。しかし、2、3年前にそれは止めた。盆と正月にはまた別にお金を納める。盆には御施食料、正月には御齋米料といってそれぞれ家に見合った額のお金を納めている。ふつうは5,000円から1万円、多い家では5万円から10万円の家もある。

むかしは寺の墓地ではなく、自分の家の屋敷の内とか畑の隅に西とか南とか方角をみて埋めていた。あちこちに墓石があった。それを昭和になって掘り起こしてまとめて雲岩寺の墓地へ移して供養をした。いまでも畑の中に墓石があるのをよく見かける。屋敷や畑の中に埋めてあれば寺へ行かなくてもお参りできるとか、寺へ行かなくてもよいので葬式代もかからぬといったものだという。

(3) 供養

家の祭壇 野辺送りの葬列がでた後、家に残った者たちは祭壇を作る。親戚や兄弟姉妹も何人かは家に残る。出棺のあと部屋に塩をふって清めとしたあと藁箒で掃き出して掃除をする。そのあとで祭壇を作る。寺や部落で3段とか5段の祭壇が用意してありそれを借りてくる。位牌は長男が持って墓地から一足先に帰る。位牌を最上段に安置して小豆の餡の入った団子と小さい団子を1対ずつ供える。その団子をまんじゅうと呼ぶ。身内がその他にも餅、うどん、蕎麦、果物、花などを供える。そして、1週間は毎日、3食とも家族と同じ膳を供える。その膳は下げておいてまとめて埋めたりむかしは川に流したりした。

寺と住職 寺の住職は葬式当日にはじめて喪家にくる。死後すぐの枕経というのではない。寺の住職は葬式が終われば寺へ帰る。お供に喪家の身内の者を一人つける。このとき「百カ日までの御飯」としてサンゴクマイ（三石米）を死人に持たせるといって伴のものが寺へ持参する。中身は晒しの袋に米一升だが、それをサンゴクマイという。枡に1升入れておいてそれを小皿で逆手にもって「三石」「二石」「一石」と声を出しながら晒しの袋に入れる。これを何人でもいいから大勢でやる。その中に死人の名前と年齢（数え年）を半紙を半分に切ったものを書いて年齢の数ほどお金を入れる。一文銭でよい。15歳なら15銭、36歳なら36銭、今なら70歳なら700円とか7,000円である。住職は寺に帰ってそれを開けてみて名前と年齢を確認してから、七本仏の塔婆に「享年何歳」と書き入れる。塔婆のその他の文言はそれまでに書いてある。

位牌 墓地への埋葬後、位牌は家へ持ち帰る。寺の位牌堂には各家ごとの位牌がまた別に納められている。その位牌が多くなると死者の名前は位牌帳に記入されていく。百カ日までは寺に3石の米を納めてあるので寺で家ごとの位牌へミニチュアのお膳をあげてくれる。

親子 親が子を亡くしたり子が親を亡くすと1週間髪をとかさない。髪をとかすとそのもつれ毛に死者の魂が旅立ちたくないと言残を惜しむからだという。女性は1週間は手ぬぐいをかぶって暮らした。

法事 法事は七日七日に行なう。初七日、二七日、三七日、三十五日、四十九日、百カ日と、寺にある墓地へ洗い米と小さな団子をもって井戸水を汲んで墓参りをする。半紙を敷いて墓前に供える。供物はカラスが食べる。早くカラスが食べればよい。カラスも食べずにいつまでも供物が残っているようだと言次の新しい死者が出る。実際にそうして死んだということもあるという。しかし、戦争末期には食糧難から貧しい人たちが隠れてそれを食べていたこともあった。

③……………血縁から地縁へ—民俗資料から

(1) 葬儀の担い手

このような日本各地の葬送習俗の調査と分析の中から指摘できる点の1つが、本稿の冒頭でも述べたように、葬儀の儀礼と作業の執行の上での分担者について、A血縁（血縁的關係者＝家族・親族）・B地縁（地縁的關係者＝近隣組・講中）・C無縁（無縁的關係者＝僧侶）の三者に分類できるということである。近年ではBに社縁（社縁的關係者＝学校・会社・役所・結社・団体など）を加

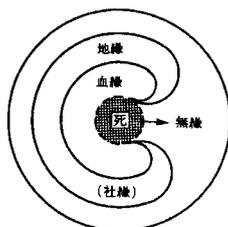
えること、そしてCに葬儀社や火葬場の職員を加えることが必要となっておりそれが現在の実態に合致している。そのような変化も含めてこの葬送関与者についての「A血縁・B地縁/社縁・C無縁」という三者分類は有効であると考え。Aは、生の密着関係が死の密着関係とみなされて死者にもっとも密着した存在とみなされ、湯灌や納棺など直接死体に接触する作業に当たる。Bは、社会的な相互扶助の関係者として、葬具作りや台所の賄ないなどの実務を執り行なう。Cは葬儀の職能者であり、伝統的には宗教的職能者としての僧侶などがそれであったが、近年では葬儀社や火葬場の職員も世俗的職能者としてこれに位置づけられる。

そして、実際の葬儀での作業について、Aの担当と想定される死体へ直接的に接触する作業をあげてみれば、それは次の8つである。

- (1) 遺体安置 (2) 湯灌 (3) 死装束作り (4) 納棺
- (5) 棺担ぎ (6) 土葬の場合の穴掘りと埋葬 (7) 火葬の場合の火葬
- (8) 遺骨拾いと納骨

人々の葬送儀礼への関与と作業分担

血縁	地縁		(社縁)	無縁
家族・親族	クミ・ムコウサンゲ ンリョウドナリ	講中	友人・仕事仲間その他	僧
末期の水 北枕 枕敷・枕団子	諸役手配 帳場・死に使いなど	葬具作り		
(親戚からは香奠)	クミからのお金	シッセニ	香奠	
湯灌 納棺	台所仕事			
通夜(夜トギ)	通夜(下働き)		通夜	通夜(読経)
葬式 野辺送り (白装束)	葬式 勝手念仏	葬式 野辺送り (ふだん着) 床取り 講中念仏	葬式 野辺送り (喪服)	葬式 十三仏供養
ひと七日 四十九日 一周忌 三十三回忌	ひと七日 四十九日 一周忌			ひと七日 四十九日 一周忌 三十三回忌



死をめぐる「縁」の模式図

図1 葬儀の担い手 埼玉県新座市大和田の事例
(新谷尚紀『両墓制と他界観』1991より)

表1 湯灌の担当者

	1960年代	1990年代
A	49	30
AB	2	0
B	0	0
AC	0	1
C	2	20*
行わない	0	3
未記入	5	4
合計	58	58

表2 死装束作りの担当者

	1960年代	1990年代
A	31	5
AB	2	0
B	8	5
C	10	34*
本人が用意	3	7
特になし	0	5
未記入	4	2
合計	58	58

表3 入棺の担当者

	1960年代	1990年代
A	48	45
AB	2	1
B	1	0
AC	1	5
C	1	4
未記入	5	3
合計	58	58

表4 葬具作りの担当者

	1960年代	1990年代
A	7	3
AB	2	0
B	36	15
BC	1	5
AC	0	3
C	9	31*
未記入	3	1
合計	58	58

表5 遺体処理の方法の変化

	1960年代	1990年代
土葬	30	6
火葬(伝統的)	25(12)	51*
未記入	3	1
合計	58	58

土葬(1960年代)30例のうち、穴に刃物(10例)、穴番・煙(4例)、柴などの覆い(3例)

凡例 国立歴史民俗博物館「死・葬送・墓制資料集成」(1999・2000)より
表1～4 A:家族・親族(血縁) B:地域共同体(地縁) C:職能者(無)
(表の数字は事例数)

図2 1960年代から1990年代への変化

(関沢まゆみ「葬送儀礼の変容」歴博フォーラム「葬儀と墓の現在」2002より)

そして、これまでの日本各地の民俗調査で確認されてきているのは、実際にほとんどの事例において、Aが担当していることが確認されているのが、(1)、(2)、(4)、(8)の4つである、そして、残りの(3)、(5)、(6)、(7)が、Bの担当という例が一般的である、なかには(3)はAとBの両者が一緒に担当するという例もある、というのが通常理解であった。しかし、1980年代から90年代の筆者の調査体験から、実際には(3)、(5)、(6)、(7)もAの担当であるとしてきている例が少なくないことがわかってきたのである。ここで例示した4つの事例で確認してみると以下の通りである。

事例Ⅰ：広島県山県郡旧千代田町本地の事例では、アタリと呼ばれる隣近所の数戸と講中と呼ばれる10数戸が葬儀の中心的な作業を死亡当日の最初から葬儀の終了の最後まで執行し、家族や親族は一切手出しをせずに死者に付き添うのみという例である。(3)だけはAの役割だが、(5)、(6)、(7)はすべてBの役割である。

事例Ⅱ：山口県旧豊浦郡豊北町角島の事例では、死亡当日の第1日目だけは葬儀の準備をすべてAの家族と親族とで行ない、2日目からBの隣近所の数戸と講中と呼ばれる20数戸が葬儀の中心的な役割を分担するという例である。この事例でも(3)だけはAの役割だが、(5)、(6)、(7)はすべてBの役割である。

事例Ⅲ：新潟県中魚沼郡津南町赤沢の事例では、Bの近隣集団よりもAの家族や親族が中心となって葬儀を執行し、火葬や埋葬は必ずAの死者の子供が中心となって行なうという例である。

事例Ⅳ：岩手県下閉伊郡岩泉町岩泉の事例では、葬儀一切はAの家族と親族が中心になって行ない、Bの向こう三軒両隣はそれを手伝うだけという例である。

事例ⅣがもっともAの血縁的關係者中心のタイプで、事例ⅠがもっともBの地縁的關係者中心のタイプで、それぞれ典型的で代表的な事例である。そして、事例ⅢがAの血縁的關係者中心のタイプに近いがややゆるやかなタイプ、事例ⅡがBの地縁的關係者中心のタイプに近いがややゆるやかなタイプ、と位置づけられる。

(2) タニンを作る村・シンルイを作る村

日本各地に伝承されてきていたこのような葬送習俗における変化形の存在はいったいどのような歴史を反映しているのであろうか。かんたんにいえば、葬儀を執行するのは身内か他人か、という問題である。そこで、もう一つ注目されるのが、葬儀においてわざわざシンルイを作るというタイプの事例と、その逆にタニンを作るというタイプの事例の存在である。葬儀にあたってわざわざタニンを作るという習俗が存在するのである。それに最初に注目したのは関沢まゆみ⁽²¹⁾であった。その関沢が取り上げたのは福井県敦賀市白木の事例であった。

事例1 福井県敦賀市白木—タニンを作る村

関沢の調査研究によれば以下のとおりである。福井県敦賀市白木は近世以来ながく分家制限を行なっており、現在も15戸だけで村が構成されている。長いあいだ村内の結婚がくりかえされてきたため、白木の人たちは、「先祖をたどればどの家とも血がつながっており、みな親戚どうしだ」という。村中が親戚関係にある15戸は、自分の家に対して他の14戸との関係をオモシンルイ（主親類）、コシンルイ（小親類）、タニン（他人）の3種類に分けている。オモシンルイは村内の結婚で結ばれておおよそ4代目までの家で5代目以降はコシンルイになるケースが多い。一方、タニンには、「ほんまの他人で、血筋でつながらない」家と実際には血筋がつながっている従兄弟どうしの場合でも「家ごとのしきたりとしてタニンになっている」という例も少なくない。家ごとの相互理解によりタニンは「つくるもの」とされているのである。具体的には表3にみるとおりである。A欄からみて1の家にとっては2の家は△でコシンルイだが、2の家にとっては×でタニンであるというように、家と家との関係がおたがいに対応していない。つまり、オモシンルイ・コシンルイ・

タニンというのは、A欄とB欄とで相互的な家の関係を表わす言葉ではなく、A欄の1から15までのそれぞれの家にとってB欄の他の1戸ずつとの関係を表わすだけの語であり、相互的ではなく一方的な位置づけになっている点の特徴である。

なぜ、タニンを作るのか。それは葬儀で棺担ぎと火葬で遺体を焼くオンボ役をやってもらったためだという。1977年（昭和52）頃から敦賀市内の市営火葬場を利用するようになるとともに葬儀社の利用も始まったが、それ以前の葬儀では村はずれのサンマイと呼ぶ火葬場で遺体を焼いていた。サンマイではシツボ（死壺）を掘って土台木を2本渡してその上に棺桶を載せて松の木で焼いていた。このオンボ役こそがタニンのしごとであった。近隣の美浜町菅浜や敦賀半島の縄間や立石では、親の葬式での墓穴掘りや棺担ぎの役は子供がするものだといっており、「菅浜では葬式は親と子だけです。最後の別れだから親と子だけでするのが本当だと思う。白木のようにタニン任せにするのはおかしいと思う」という人も少なくない。

つまり、この敦賀市域では遺体に接触する役である棺担ぎや火葬や埋葬は血筋のつながる身内の者が当たるべきだということかたちが多く存在する中で、その一方、白木のように血のつながる親戚関

表13 白木のオモシルイ・コシルイ・タニンの関係

A欄の家番号からみた主親類・小親類・他人の関係

A \ B	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1	△	×	△	×	△	◎	△	△	◎	△	◎	×	◎	△	◎
2	△	△	◎	×	△	△	△	◎	△	△	△	△	×	△	◎
3	△	◎	△	△	◎	◎	△	◎	△	△	△	×	×	×	◎
4	×	×	△	△	△	△	△	◎	◎	×	×	×	◎	◎	△
5	△	△	◎	△	△	◎	◎	×	△	×	◎	◎	×	×	×
6	◎	△	◎	△	△	△	×	△	×	△	◎	△	×	×	◎
7	△	△	△	△	◎	×	×	×	△	◎	△	×	◎	◎	△
8	△	◎	◎	◎	×	△	×	×	◎	△	△	△	△	△	△
9	◎	△	△	△	△	×	△	×	△	◎	◎	◎	△	△	◎
10	△	×	△	×	×	×	◎	◎	◎	△	×	△	△	△	×
11	◎	△	△	×	◎	◎	△	△	◎	×	△	◎	△	×	◎
12	×	△	×	×	△	△	×	△	◎	△	◎	△	△	×	△
13	◎	×	×	◎	×	×	◎	△	◎	◎	△	△	△	◎	△
14	△	△	×	◎	×	×	◎	△	△	△	×	×	◎	△	×
15	◎	◎	◎	△	×	◎	△	△	◎	×	◎	△	△	×	△

注 数字：図24の家番号

◎：主親類、△：小親類、×：他人

本文にも述べたように家と家の関係が対応していない場合もある。

（関沢まゆみ「葬儀とつきあい」『宮座と老人の民俗』吉川弘文館 2000 より）

係の者の中からわざわざタニンを作ってその役に当たってもらうというかたちができきているのである。それはもともと棺担ぎや火葬や埋葬は血縁の関係者が当たるかたちであったのが、そうではなく地縁の関係者が当たるべきだという新たな考え方が起こってきてからのことと考えられる。実際には血縁の関係者なのに、地縁の関係者になってもらうことによってその役を担ってもらうことができる、という考えかたは、まさに血縁以外の人に依頼すべきだという考え方が新たに起こってきたからこそ工夫であったと考えられるのである。

この白木のようなタニンを作るという例とは対照的に、逆に葬式のためのシムルイを作るという例が一方にはある。葬式のために他人にソーレンシムルイになってもらうというしきたりを伝えている村である。そのような例の1つが滋賀県蒲生郡竜王町綾戸である。

事例2 滋賀県蒲生郡竜王町綾戸—シムルイを作る村—

綾戸はこの一帯の33ヵ郷の莊園鎮守社として古い由緒を伝える苗村神社の地元の約72戸の村落である。古くから神聖性と清浄性が要求されそれが強調される苗村神社の地元の集落であることから、集落内に死穢の充満するような埋葬墓地を設けることができずに、綾戸では隣の田中という集落に借地して埋葬墓地をそこに設営して利用してきた。その綾戸の集落は一部には血縁的な本分家関係や姻戚関係の家もあるが、ほとんどはそうではなく地縁的な関係の家々からなっている。近畿地方の村落では血縁的な同族集団によって家々が構成されているタイプの村落ではなく、この綾戸のように地縁的な家々によって構成されているタイプの村落が多いのが一般的傾向である。そして、そのような場合でも、葬送の儀礼や作業においては集落内の相互扶助によって棺担ぎや墓穴掘りや埋葬の役が近隣の家々の間で回り当番によって担当されている。筆者の1970年代の民俗調査、主として両墓制事例の民俗調査の中でも、たとえば京都府綴喜郡旧田辺町打田の事例では近隣の回り当番での墓穴掘りや埋葬の役が決められていた。しかし、その当番に当たっていわゆる隠亡役の墓穴掘りや埋葬の役をつとめてもらった人たちに対しては、喪主とその妻が墓地からの帰り道の路傍で荒筵を敷いて土下座をして彼らにお礼の挨拶をするのがしきたりであった。また、そのような隠亡役をしてもらった人たちには、その作業のあとでまずは風呂に入ってもらい、上座に座ってもらってお酒とごちそうとでもてなすのがきまりだという例が近畿地方の村々では多かった。墓穴掘りや埋葬はそれほど重い役であると位置づけられていたのである。しかし、この綾戸ではそのような土下座や風呂浴びや酒席の接待のしきたりはない。それは逆にシムルイになってもらっていることでクリアされているのではないかと推定できる。

具体的な綾戸のソーレンシムルイの関係の例を示せば、表4のとおりである。72戸のそれぞれにソーレンシムルイとしての付き合いができている家が決まっているのだが、それらには血縁関係の家もあるが、そうではない縁故不明の他人が多く含まれている。そして、ソーレンシムルイは近隣関係の家々でもない。また相互的な関係でもない。前述の白木のタニンと同様に個々の家ごとに作られている関係であり、その編成は村落運営のレベルでなされたのではなく、個々の家ごとに過去のいつかの世代に結ばれた依頼関係によってなされてきたものである。人びとは「理由はわからないが、代々そうなっている」といい、葬儀の時には「大事なお方」だといっている。ソーレンシムルイのしごとの中心は葬儀の手伝いであり、とくに埋葬墓地サンマイでの墓穴掘りと遺体の埋

表14 綾戸のソーレンシンルイの例

(安井武家と安井幸彦家の例 数字は調査時の家の整理番号)

No.36 安井家 安井武	18	松井良夫	母親の実家
	35	西村巳千治	No.18 が親元
	37	勝見和夫	(縁故不明)
	38	西村利和	(縁故不明)
	45	安井幸彦	本家
	58	田中義一	姉の嫁ぎ先
	62	小野定親	同じ定紋。No.4 5が本家
	64	勝見清一	No.18 の兄弟
No.45 安井家 安井幸彦	7	福田茂	甥
	17	松井隆	(縁故不明)
	19	並川清	(縁故不明)
	29	勝見正	(縁故不明)
	34	布施元一	(縁故不明)
	36	安井武	新家
	44	安井正親	弟
	47	勝見明雄	隣人
	49	安井養治	(縁故不明)
	52	勝見正男	〃
	54	勝見総一郎	〃
	57	勝見貞夫	(縁故不明)
59	勝見健男	(縁故不明)	

葬である。最近では火葬になったので埋骨するだけの約30センチ四方の穴を掘るだけとなったが、かつては棺を埋める大きな穴でなるべく深く掘ってもらっていた。ただし、掘る際には必ずサンマイまで喪家の主人がついて行き掘る場所を指定した。サンマイは完全な共同利用で家ごとの区画はなかった。それで埋葬のつど古くなった場所など適当な地点を選んだ。ソーレンシンルイの中の墓穴掘り役の約3、4人はむやみにスコップを下ろしてはならなかった。必ず喪主が指定し依頼した場所にスコップを下ろし、いったんスコップを下ろしたらそこから決して場所をかえてはならなかった。

この近江の綾戸という一村落に伝えられている、埋葬地点は必ず喪主が指示し決定するというのは、墓地を死穢の場所として極端に忌避するというを徹底させてきている綾戸の習俗としては、一見するとたいへん奇妙なしきたりである。しかし、民俗伝承の全国比較の視点に立ってみるならば、冒頭で紹介した陸中安家村の喪主によるヤシキトリの慣習とのあいだに一定の共通点があることに気づく。それは葬送における喪主の役割である。この2つの小さな共通点は、日本の葬送民俗の長い歴史の中ではたがいに地下水脈ではつながっている可能性があるのである。柳田國男が提唱した全国規模の幅広い民俗の情報蒐集とそれらの比較の視点の斬新性と重要性とが、いまさらながらおそろしく深い洞察力に裏付けられたものであったことに驚かされるのである。この綾戸の葬儀ではいちばん死穢に触れることとなる埋葬の作業はソーレンシンルイに頼むとしても、野辺送りで棺を運ぶ輿を昇くのは従兄弟などの血縁関係者であり、葬儀の重要な役はやはり血縁関係者が当たるべきだという考え方が残っているのである。つまり、本来は血縁関係者が担当するはずの棺担ぎ

や墓穴掘りや埋葬という遺体に接触する重い役、ふつうは忌避されるような役が、シンルイになっ
てもらっていることによってクリアされている、という工夫が見出されるのである。

④……………血縁から地縁へ—歴史史料から

(1) 古代・中世の記録にみる親族による葬送

このような現在、現代の民俗情報であるが、その意味を考える上では、歴史的な情報にも注目し
てみる必要がある。なぜなら民俗とは伝承 tradition であり、現在の情報であると同時に歴史的
な背景を背負った情報でもあるからである。ただし、古代中世の一般庶民の葬送の実際や実態に関
する記録情報は少ない。わずかに往生伝の類や仏教説話の類などの中にいくつかの参考情報がある
程度である。文献史学の立場からいえば、それらはしよせん第2次史料のレベルのものでしかない。
民俗学にとっても歴史を語る上では参考資料に過ぎないレベルのもものと位置づけておくしかない。
しかし、具体的な葬儀の実例情報の記録が欠乏しているという実情からすれば、あくまでも参考情
報に過ぎないと自覚しながらも、あえてそれらに注目してみることも必要であろう。たとえば以下
のような記述が知られている。まずは平安時代後期の長承元年(1132)成立とされる三善為康の『拾
遺往生伝』の記す例である。

史料1 『拾遺往生伝』巻中第26話「下道重武者、左京陶化坊中之匹夫也。(中略)宅無資貯、又無親族、
死後屍骸、誰人収斂乎、遺留妾兒旁有勞、」

史料2 『拾遺往生伝』巻上第19話「汝是寡婦、争斂死骸、為省其煩、故以離居、」

これらによると、史料1では、「宅無資貯、又無親族、死後屍骸、誰人収斂乎」、「遺留妾兒旁有
勞」とあり、史料2では、「汝是寡婦、争斂死骸、為省其煩」とある。つまり、資財や親族がない
場合には誰も死骸を収斂してはくれないということが知られる。出家した僧侶の場合は親族はない
が、それに代わる弟子や資財が葬送には必要であり、在家の一般庶民の場合には親族や資財が必要
とされており、それらは死骸の処理と葬送の執行の上では必要最小限の一定の負担とされていたこ
とがわかる。

次に、やはり平安時代後期、保安元年(1120)以降で12世紀前半の成立とされる『今昔物語集』
の記す例である。

史料3 『今昔物語集』巻24第20話「其女父母モ無ク親シキ者モ無カリケレバ、死タリケルヲ取
リ隠シ棄ツル事モ無クテ、屋の内ニ有ケルガ、髪モ不落シテ本ノ如ク付タリケリ」

史料4 『今昔物語集』巻28第17話「(死んだ僧が)貧カリツル僧ナレバ、何カガスラムト推量ラ
セ給テ、葬ノ料ニ絹、布、米ナド多ク給ヒタリケレバ、外ニ有ル弟子童子ナド多ク来リ集テ、車ニ

乗セテ葬テケリ。(中略) □ガ葬料ヲ給ハリテ、恥ヲ不見給ヘズ成ヌルガウラヤマシク候也。□モ死候ヒナムニ、大路ニコソハ被棄候ハメ。」

史料3では、親族がいなければ誰も死骸は処理せずに死後は放置される、史料4では資財があれば立派に死骸が処理され葬送が行なわれる、ということがわかる。

次に、鎌倉時代後期の弘安6年(1283)の成立とされる『沙石集』の記す例である。

史料5 『沙石集』巻1第4話「母ニテ候モノノ、悪病ヲシテ死ニ侍リケルガ、父ハ遠ク行テ候ハズ、人はイブセキ事ニ思ヒテ、見訪フ者モナシ。我身は女子ナリ。弟はイヒガヒナシ。只悲シサノ余ニ、泣ヨリ外ノ事侍ラズ。」

次に、鎌倉時代末期14世紀初頭の成立とされる『八幡愚童訓』の記す例である。

史料6 『八幡愚童訓』乙 下巻第3話「我母にてある者の今朝死たるを、此身女人也、又ひとりふどなれば送るべきにあらず、少分の財宝もなければ他人にあつらへべき事なし。せんかたなさのあまりに立出たる計也。」

史料7 『八幡愚童訓』乙 下巻第4話「近来備後国住人覚円と云し僧、大般若供養の願をたてて当宮に参宿したりしが、世間の所勞をして死にけり。無縁の者なりければ実しき葬送などに及ばずして、さかが辻と云所に野すてにしてけり。」

史料6からは親族がなく財宝もなければ他人に葬送を依頼することはできない、史料7からは親族がいなければ野棄てにされる、ということがわかる。このような類の葬送関係の記事は他にも散見されるが、少なくとも以上のように、古代中世の社会では一般的に、死と葬送は親族の負担で処理されるのが当然であり、それがなければ資財をもって他人に依頼することもありえた、しかし、そのいずれもないような場合は「野棄て」にされるのもしかたないと考えられ、実際にそのような例も少なくなかった、ということが推定されるのである。

(2) 近世における地縁的な組織としての講中の形成

このような古代中世のわずかな文献情報からの推定ではあるが、民俗伝承の中で先にあげた事例Iから事例IVまでのような変化形が存在するという事は、葬送の主たる執行者がもともとは血縁の関係者が中心であったというのが古いかたちであり、その後、地縁的な関係者の協力というかたちが歴史的に形成されてきたのではないかとすることを想定させる。では、冒頭の事例Iの広島県山県郡北広島町の旧千代田町域の事例のように、死亡の直後から火葬と納骨など葬送の終了までのいっさいの作業を近隣集団の手に委ねるといふ、いわば極端な地縁中心的な方式が実現してきているその背景には何があったのか、その点について追跡してみたい。

安芸門徒の講中と化境 広島県西部の旧安芸国では俗に安芸門徒と呼ばれるように浄土真宗西本

願寺派の門徒寺とその門徒が圧倒的に多い。その歴史的な背景としては、『芸藩通志』が伝えるように、もともとの浄土真宗寺院に加えてもとは禅宗など他宗の寺院であったものの転宗がさかんに行なわれたことが考えられる。山県郡では近世に浄土真宗寺院となっていた47カ寺の内、30カ寺はもともと浄土真宗であったが、その他の12カ寺は禅宗から、2カ寺は真言宗からの転宗である。その転宗を促進したインパクトとして沖野清治は次の4つをあげている。⁽²²⁾(1) 16世紀後半以降圧倒的な支配力をもっていた戦国大名の毛利氏が石山本願寺と織田信長との間のいわゆる石山合戦において石山本願寺を支援したこと、(2) 寺伝で永正年間に三次市域から高田郡原田村、高田郡船木村へと坊を移したと伝える浄土真宗の有力寺院照林坊が本願寺教団の一員としてこの地域で組織的な活動を展開したこと、(3) この地方で圧倒的な支配力をもっていた毛利氏と吉川氏という二大領主が関ヶ原の合戦(1600年)の後、それぞれ長州の萩へ防州の岩国へと転封されてこの地にいなくなったこと、(4) 福島正則の広島入封(1601年)とそれにとまなう慶長検地の執行により旧来の寺院がその寺領を没収されたこと、以上の4つのインパクトが断続的に起こったことが他宗寺院

表 15 本地の寺檀関係

天保14年(1843)山県郡本地村宗旨御改帳にみる寺檀関係
(山県郡千代田町伊達家文書より作成)

村名	寺院名	門徒数	寺院系統	備考
高田郡横田村	敬覚寺	4	光照寺系	
〃 多治比村	長楽寺	10	〃	
〃 多治比村	教善寺	3	仏護寺系	
〃 上根村	善教寺	7	〃	
高宮郡下町屋村	西光寺	22	〃	
〃 中嶋村	超円寺	1	〃	
沼田郡相田村	正伝寺	11	〃	十二坊
広島寺町	報専坊	107	〃	〃
〃	仏護寺	10	〃	
〃	元成寺	7	〃	十二坊
〃	円龍寺	4	〃	〃
〃	徳応寺	2	〃	〃
〃	正善坊	3	〃	〃
山県郡本地村	浄楽寺	57	〃	
〃 本地村	浄専坊	45	〃	
〃 本地村	専教寺	31	〃	
〃 木次村	光雲寺	2	〃	
〃 南方村	浄徳寺	1	〃	
〃 有田村	光明寺	10	〃	
〃 壬生村	教得寺	3	〃	
〃 今田村	報専寺	4	〃	
〃 寺原村	西光寺	14	〃	
〃 蔵迫村	勝龍寺	16	〃	
〃 中山村	円光寺	1	直参系	
〃 大朝村	円立寺	6	〃	
〃 岩戸村	明円寺	1	〃	
〃 阿坂村	安養寺	1	仏護寺系	
石州邑智郡鱒淵村	高善寺	1	不明	

(沖野清治『近世浄土真宗の寺檀関係と講中組織』1990より)

の浄土真宗寺院への転宗の契機となったと論じている。筆者も基本的にこの論考を支持するところである。

そうして圧倒的な浄土真宗地帯となっていったこの地域の寺院と門徒との関係の上での大きな特徴は、家ごとにみればそれぞれの門徒寺が遠隔地に存在しており、地域ごとにまとまっていないという点である。たとえば、表5にみるとおりである。表5の本地村の例では、地元の寺である浄楽寺、浄専坊、専教寺という3カ寺の門徒もそれぞれ57戸、45戸、31戸とあるが、それ以外の遠隔地の寺院の門徒もひじょうに多い。数の上でも広島寺町の報専坊の門徒は107戸というほどの多さである。このような門徒寺と門徒とのあり方では門徒の活動は地域社会の活動とは遊離したものになってしまう。門徒寺と門徒との関係が地元の家々の日常的な地域社会の活動と連繋することはできない。門徒組織と村落組織とが一致していないのである。そこで、工夫されたのが化境^{けきょう}という制度であった。それぞれの家が結んでいる遠隔地の門徒寺との寺檀関係とは別に、近世になって形成されてきた地域的な講中の組織をあらためて地元の寺院の化境として把握するという方式が採用されたのである。地元の寺が「化境寺」としてそれぞれの地区の家々を「化境下」として把握していくのである。それは村落組織でありながら信徒組織として形成されてきていた講中の組織を地元寺院が化境下として把握しなおすものであった。それにより、村落組織が信徒組織として把握され、家々からみれば講中、寺からみれば化境もしくは化境下ということになっていったのである。その講中の活動は、日常的には毎月1回の宿を決めての小寄講と年に1回の報恩講、そして最大の役割が葬儀⁽²³⁾の際の互助協力である。

講中と化境の形成 では、その講中と化境の形成はどのようにしてなされたのか。まず注目されるのは、山県郡戸谷村（のち豊平町、現在北広島町）の浄円寺の所蔵する延宝5年（1677）の「戸谷村浄円寺二付村中定書一札」という文書である。包みの上書きに「公義ヨリ御書一通」とあるものと「村中定書物一札 組頭中」とあるものがセットになっているが、この文書は浄円寺の住職が地域の者と折り合いが悪くなり石見国大森銀山の幕府代官領内に立ち退いた事件に対して、もとの戸谷村の寺に帰るように働きかけて、その待遇を明示したものである。その「村中定書物一札 組頭中」には次のようにある。

申定一札之事

一、浄円寺殿所之者持居不申候二付かんにん罷成不申候て今度銀山一門之所へ牢人仕候二付、御公儀様より急度呼戻し所之すまひ仕候様こと被仰付候二付皆々立相談仕、所之茶香とき坊主二仕、所に置申様二仕候事相違無御座候事、

一、鶉木之者共ハ親々申定候通ニ手次ニ可仕候、村中茶合之儀者当月より浄円寺殿にてよろこひ可申候、(中略) 右之条々無相違様ニ可仕候、若相違候ハ、此書物を以庄屋組頭小百姓ニ至迄越度ニ可罷成候、為後日如件

延宝五年巳ノ七月廿七日

戸谷村組頭 七郎左衛門 印

(以下計7名連署 印)

戸谷村 浄円寺 殿

同村 庄屋忠左衛門 殿

この文書によれば、銀山領から帰ってきた住職に対して組頭が連名で「所之茶香とき坊主」として遇することを約束している。この「茶香」とは現在も安芸門徒の間で行なわれている「お茶講」のことと思われる。次の「村中茶合之儀」も同様で、この時期に早くも講中の会合が行なわれていたことを考えさせる史料である。⁽²⁴⁾

またこれとは別に、講中と化境の成立について追跡した沖野清治はその論文で、山県郡加計村加計本郷の例では元禄5年(1692)の常禅寺の棟札などの史料から、はじめは一族あるいは血縁関係によって組織されたものであったが、その後人口増加によって非血縁者も加わり、講中の数も増えて、当初は一つの講中しかなかった本郷に文政2年(1819)ころには4つ以上の講中が形成されていたことを指摘している。また、山県郡大朝町の稲垣家文書の中の正徳3年(1713)の「新古法之義ニ付人別判帖」という史料に、西本願寺の安芸地区の触頭である広島寺町の仏護寺(現在広島別院)が、郡部の門徒の中に仏護寺にかくれて地元で「講寄等仕もの」があると非難している記述があり、それも地域社会での講中の活動が始まっていたことを示すと指摘している。そして、天明1年(1781)11月18日付のその広島寺町の仏護寺から京都の西本願寺の僧官に提出した書状の中に、
「当国諸郡村門徒法用之儀者、従往古城下寺庵之門徒ニ而茂、其村々寺庵之ヨリ報恩講並毎月大寄小寄講等相勤、寺相統致来候」

とあるように、天明期にはほとんどの村で大寄小寄などの講中ではできていたであろうと指摘している。しかし、同時にこの天明1年(1781)11月18日付の広島寺町の仏護寺から京都の西本願寺の僧官に提出した書状の中では、先の文言に続けて以下のように記されている。

「寺相統致来候」に続いて、「近来諸郡村之門徒自身之門徒故直勤致候故、其村々之寺庵只今迄之法用無之様ニ追々成行、寺相統相成不申候、ケ様ニ新規之取計有之候而者、第一法義相統之妨又者人氣騒動ニ茂相成可申候間、已来急度従往古仕来之通、自身之門徒ニ而茂、其村寺庵勤来候法用者、門徒ヨリ相頼候共、其訳合を致教戒新規ニ相勤不申様御示被 仰付可被下候、此段追々郡中寺庵ヨリ嘆出申候、右之御示御連署以下ニ而急度被 仰付可被下候」(下線筆者)。

つまり、広島城下の有力寺院が遠隔地の村方における門徒たちの大寄講や小寄講に対してそれを収入源として注目するようになり、「直勤」を求めて乗り出してきているのである。しかし、それでは村方の寺庵は法用もなくなり相統もできなくなるとして、広島教区の触頭たる仏護寺として京都の西本願寺へ、このような「新規之取計」は認めないように、「従往古仕来之通」の通りと指示して村方の寺庵が経営、相統できるように取り計らってほしいと願っている⁽²⁵⁾のである。

これらによると、「其村寺庵勤来候法用」というのが「従往古仕来之通」とされており、この天明期にはすでに村々の講中が地元の寺院の化境として機能していたことが知られるのである。そしてこれらの情報からは講中の形成と化境の形成とが表裏一体のものであったことがわかる。これまでの安芸門徒の講中と化境の成立に関する通説では、本末・寺檀関係の乱れを規制することの必要性から、広島寺町の報専坊の慧雲(1730～82)らによって組織され、宝暦年間(1751～69)以降に整備されたものとされてきているが、その宝暦年間という年代についての明証はない。先の沖野の研究を参考にすれば、講中の成立は17世紀中葉以降、はじめは血縁関係を中心にしたものや寺院の経営基盤を確立するためにつくられたものなどさまざまであったが、享保年間(1716～36)には地縁的な事例も確認されるなど、18世紀前半には各地に現在にまでつながるような強力な地

縁的組織としての講中の成立がみられたことがわかる。そして、その整備の象徴的な功績者として高僧の名も高かった慧雲の存在が伝説的に位置づけられていったものと推定されるのである。

⑤……………論点

以上のような事例情報からここで主要な論点をまとめてみるならば、以下の通りである。

(1) 日本各地の葬送習俗の中に見出される地域差が発信している情報とは何か、それは長い伝承の過程において起こった変遷の跡を示す歴史情報である。そして、多くの変遷の中にも息長く伝承され継承されている部分の存在を示す情報である。柳田國男の提唱した民俗学の比較研究法とはその変遷と継承の二つを読み取ろうとしたものであった。しかし、戦後のとくに 1980 年代以降の日本の民俗学関係者の間ではそれが理解されず、むしろ全否定されて個別事例研究の実効性のみが主張される動きがあった。それは柳田が創生した日本民俗学の基本とその独創性を否定するものであり、そこからは学術的な自らの位置を明示できない懸念、たとえば文化人類学や社会学などとの学問としての相違が説明できないという懸念が生じた。それは民俗学の存在理由の説明自体の危惧にもつながる問題である。今からでも遅くはない。柳田創生の日本の民俗学の独創性を継承発展させるためには柳田の説いた視点と方法への理解と実践とが必要不可欠である。それは柳田が *tradition populaire* を民間伝承と翻訳して自らの学問を「民間伝承の学」と呼び全国規模の民俗伝承情報の蒐集整理と比較分析とによって生活文化の変遷と伝承とを考究しようとした提唱に学ぶところから始まる。内外の誤解を解くために日本民俗学はフォークロアという名乗りを止めて、あらためて *tradition populaire* を再解釈して伝承分析学 *トラディショノロジー traditionology* と名乗るべきである。その伝承分析学(日本民俗学)は「変遷論」と「伝承論」という 2 つの側面をもつのが特徴であり、変遷論の視点から明らかにしようとするのは、地域差や階層差などを含めた立体的な生活文化変遷史であり、伝承論の視点から明らかにしようとするのは、長い歴史の変化の中にも伝えられている変わりにくいしくみ、伝承を支えているメカニズムであり、それを表わす分析概念の抽出である。

(2) 本稿は柳田に学ぶその伝承分析のひとつの作業例であるが、日本各地の葬送習俗の中に見出される地域差、たとえば本稿でとりあげた葬送の作業の中心的な担当者が血縁的關係者か地縁的關係者かという点での事例ごとの差異、それが発信している情報とは何か。それは古くは血縁的關係者であったのが後に地縁的關係者へと変化したという段階的な葬送習俗の変遷史についての情報である。古代中世は基本的に血縁的關係者が中心であったが、近世の村落社会の中で形成された相互扶助の社会関係の中で、地縁的關係者が関与協力する方式が形成されてきたという歴史を、民俗伝承はそれぞれの事例ごとにその変遷の段階差を示すかたちで伝えているのである。逆にいえば、民俗伝承の事例ごとの差異の中からその民俗伝承の変遷史を再構成できる可能性があるということである。歴史に関する情報として文献記録の情報を参照する必要があることは当然であるが、文献記録が欠落している歴史事実も膨大に存在する。そのような歴史事実の再構成にも民俗伝承を資料とする民俗学(伝承分析学)は寄与することができる。ここでは古代中世の血縁中心から近近代の地縁中心へとという変遷を結論として得ることができたが、高度経済成長期以降の葬儀の変化の中心は葬儀業者の分担部分の増大化であり、現代近未来の葬儀が無縁中心へと動いているという大きな

変化が眼前にある。それについては本報告書の別稿「葬送習俗の民俗変化2」で詳しく論じてある。本稿とその別稿とで指摘できるのは、血縁・地縁・無縁という歴史的な三波展開論である。そして、そのような長い歴史の大きな変遷史の中でも変わることなく通貫しているのは、いずれの時代にあっても基本的に生の密着関係が同時に死の密着関係へと作用して血縁関係者が葬儀の基本的な担い手とみなされるという事実である。近年の「家族葬」の増加という動向もそれを表わす一つの歴史上の現象としてとらえることができる。

(3) 民俗伝承の変化は歴史を通じてのものであるが、とくに昭和30年代(1955～65)から40年代(1965～75)の日本の高度経済成長の影響は甚大であった。その以前と以後とでは、民俗学が注目する経済伝承・社会伝承・信仰伝承・儀礼伝承・言語伝承/芸能伝承のあらゆる側面で根底的な変化が起こった。その高度経済成長からすでに約40年の歳月が流れた結果、1960年代まで日本の各地で大小さまざまな地域差をもって伝えられていた民俗伝承は大きく変貌もしくは消滅していった。葬送習俗の伝承も例外ではない。それら過去の民俗伝承が発信していた情報の貴重さがいま思いを巡らしてもすでにそれらの情報を蒐集することは不可能である。しかし、1990年代の民俗調査の時点ではまだ人びとの経験と記憶の中に1960年代以前まで伝えられていた民俗伝承の情報は蒐集することができた。高度経済成長にともなう大規模な生活変化の中で消滅していった民俗伝承であってもそれは意味のない過去のものではない。その歴史的また文化的な価値は高い。そこで、民俗学の世代責任という課題が浮上してくる。2010年代の民俗研究の現在の世代責任として考えるならば、1990年代に蒐集された1960年代まで伝承されていた民俗の情報もいまその蒐集に当たった筆者たちの世代がその分析を試みておく必要がある。民俗学はつねに同時代的な生活変化の中に調査研究をすすめているのであり、その対象はつねに変化の中にあるということ、そしてそれぞれの世代に応じた研究上の世代責任がある、ということである。

註

- (1)——『人類学雑誌』44-6 1929 (『定本柳田國男集』15所収)
- (2)——『井之口章次「仏教以前」古今書院1954
- (3)——『最上孝敬「詣り墓」古今書院1956
- (4)——『「葬送墓制研究集成」全5巻 名著出版1979
- (5)——『葬送の民俗をめぐる研究には二つの傾向があり、1つは葬送の儀礼構成に注目するもの、もう1つは葬儀における社会関係に注目するもので、これらは前者の例である。後者に属する研究は、関沢まゆみ『宮座と老人の民俗』吉川弘文館2000、中込睦子『位牌祭祀と祖先観』吉川弘文館2005などやや遅れて刊行された。
- (6)——『「国立歴史民俗博物館資料調査報告書9 死・葬送・墓制資料集成」東日本編1・2、西日本編1・2(総計約2000頁)1998、1999、なお、委員の事情で実際に収集された事例情報は58事例であった。
- (7)——『国立歴史民俗博物館編「葬儀と墓の現在—民俗の変容—』吉川弘文館2002
- (8)——「たとえば山田慎也『現代日本の死と葬儀』東京大学出版会2007など
- (9)——「この国立歴史民俗博物館の基盤研究「高度経済成長とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究」(2011～2013年度)もこのような問題意識が共有されて企画され、その参加者によって研究報告の刊行がなされている。
- (10)——「経済学の立場からは、高度経済成長とは1955年の神武景気から1973年の第1次オイルショックまでの18年間継続した異例の経済成長をいうが、生活変化を追跡する民俗学の観点からは1955年から1975年までの20年間を高度経済成長期ととらえて、実はその後の1980年代、90年代に現実化する生活の大変化をも含めて、やや長い時差をも考慮してその時代を把握することとする。

- (11)——『新谷尚紀『両墓制と他界観』吉川弘文館1991
- (12)——『新谷尚紀『民俗学とは何か—柳田・折口・渋沢に学び直す—』吉川弘文館2011
- (13)——『新谷尚紀『民俗学とは何か—柳田・折口・渋沢に学び直す—』註12
- (14)——『新谷尚紀『民俗学とは何か—柳田・折口・渋沢に学び直す—』註12
- (15)——『関沢まゆみ「『戦後民俗学の認識論批判』と比較研究法の可能性』『国立歴史民俗博物館研究報告』第178集(国立歴史民俗博物館開館30周年記念論文集I)2013
- (16)——『新谷尚紀『ケガレからカミへ』木耳社1978, 同「ケガレの構造」岩波講座『日本の思想』第6巻 岩波書店2013
- (17)——「たとえば竹内利美「村社会における葬儀の合力組織」『ムラと年齢集団』名著出版1991(初版1942)など参照。
- (18)——『新谷尚紀『民俗学とは何か—柳田・折口・渋沢に学び直す—』註12
- (19)——『1993年に廃寺。なおこの寺は西洋哲学者として著名な三枝博音の実家である。
- (20)——『現在の講中は部落と重なるようになっているが、土地の言い伝えによると、昭和12,3年(1937,38)ころまでの部落の分け方は現在の部落とは異なり、そのころの部落は講中とはまったく別であったという。当時、部落は二〇くらいあい、講中は一四,五あった。講中は家が離れて飛んでいるような家同士でも組んでいた。全部で一四,五あった講中のうち、たとえば専教寺の化境は七つか八つあったという。この昭和12,3年(1937,38)ころの部落の編成のしなおしという言い伝えを裏付けるのは、『農村建設計画策定に関する調査—広島県山県郡本地村—』農林省農地局計画部経済課発行昭和25年(1950)1月(『千代田町史 近代現代資料編(下)に抄録)にみえる「昭和十一年三月、当時の農事実行組合、講中を統一して行政の簡素化を計るために一三部落に改別、更に昭和二十四年十一月一日、十三部落の外に開拓地が一部出来これを旧部落に加え一四部落となり現在に至っている。」という記事である。
- (21)——『関沢まゆみ「他人をつくる村」『比較家族史研究』11号1996,のち「葬儀とつきあい」『宮座と老人の民俗』吉川弘文館2000所収
- (22)——『沖野清治『近世浄土真宗の寺檀関係と講中組織』兵庫教育大学大学院修士論文(1989年度提出)1990
- (23)——『新谷尚紀「寺院の信仰と民俗」『千代田町史 民俗編』(広島県千代田町)2000
- (24)——『『千代田町史 資料編 近世(下)』所収(443-444頁)
- (25)——『『千代田町史 資料編 近世(下)』所収(449-451頁)の「組合村々万覚帳」(広島大学寄託・加計隔屋文庫蔵)にみえる「報恩講勤方二付達」(文政四年)という文書にも、文政4年(1821)当時の同じ動向が記されている。山県郡一帯には有力寺院たる広島十二坊の門徒がひじょうに多く、郡内各地の地元の寺には門徒が少ない状態であったため、地元寺院が広島十二坊の門徒寺の下寺として門徒を預かるかたちの「預かり門徒」の例が多かった。しかし、それでは本当の広島門徒寺と地域の門徒との関係が薄くなってしまっているので、浄土真宗の年間行事として最重要な報恩講だけは上寺から「直勤」したいという申し入れが御番組衆に対して行なわれたが、それに対して、郡内の割庄屋が連名で今までどおり「預かり寺」が報恩講を勤めるのが実情にあって旨を報告している。
- (26)——『『広島県史』近世1 1152頁

(國學院大学文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2013年12月21日受付, 2014年5月26日審査終了)

Changes in Funeral Customs I : A Case Study of the South-Central Part of Okinawa Main Island

SHINTANI Takanori

This article discusses the issue of what information is found in differences in funeral customs between regions in Japan. That is historical information to trace shifts during transmission from generation to generation as well as to prove some consistency and continuity over time in spite of the transition. In order to grasp this change and continuity, Kunio Yanagida proposed and advocated a comparative study approach in Japanese folklore; however, most folklorists in the post-World War II period, especially after the 1980s, completely neglected this approach and explored individual cases without understanding his intention. This trend denied the originality of the Japanese folklore originated by Yanagida, which led to a problematic situation where it could neither distinguish itself from cultural anthropology or sociology nor establish itself as an independent academic discipline. In order to preserve and develop originality of Japanese folklore, it is crucial to accurately understand Yanagida's perspectives and methodologies, newly develop and refine them, and apply them to practical studies. In other words, this academic discipline should be established as traditionology in name and reality rather than as folklore. For example, differences in traditional funeral customs between regions in Japan include information of who is chiefly responsible for organizing funerals, either blood relations or locality group members. This information shows the history of the shift from a system based on blood relations in the ancient and medieval world to a system based on locality groups established through social relationships of mutual cooperation and surveillance in the early modern village world, as well as differences between the stages of the change. This Paper I, as well as Paper II, is issued as part of the collaborative research, revealing that one of the major changes in funeral customs after the high economic growth period, from the mid-1950s to the mid-1970s, was the increasing involvement of funeral directors. This is considered as an early sign that funeral services is changing to involve third parties in the present and near future. In brief, these trends show a historical three-stage transition in people responsible for organizing funerals: from blood relations to locality groups and to third parties. However, in spite of these changes over time, there is certain continuity in funeral rites: that is a timeless fact that, in principle, blood relations are considered as key people in funeral services because close relationships in this world form close relationships in the world to come. This is also evidenced by another historical phenomenon: the recent increase in family funeral

services.

Key words: traditionology; comparative study approach; transition theory and transmission theory; blood relations, locality groups, and third parties; each generation's responsibility for studies